

徳島の剣道

第 9 号



徳島県剣道連盟
徳島市西陽町2丁目96番地
〒770 電話(0886)52-2337



剣道時代 平成4(1992)年10月号 第22回全国中学校選抜剣道選手権大会決勝戦
那賀川中学校大将敷田のメンが決まった瞬間



平成4年度第22回全国中学校選抜剣道選手権大会 市場中学校



←第5回全国健康福祉祭山梨大会
山梨市民体育館にて



↑6月21～22日の間高知県立武道館で行
われた四国高校剣道選手権大会で2年
ぶり5度目の優勝を果たした富岡東高
女子と個人2位の磯部選手



↑平成5年1月24日(日)
於鳴門運動公園武道館
四国高齢者研修会



↑第14回全日本高齢者剣道大会
特組 優勝 平岡竹雄
B組 準優勝 遠藤一美

卷頭言



徳島県剣道連盟会長 堀江幸夫

佐藤一斎は人生は生涯学習だと教えている。

又、孔子は「終日食わず終夜寝ねず以って思えり益なし学

ぶにしかず」と。

生涯現役で剣道を学ぶ私どもは、かえりみてそれにふさわ

しい勉強ができているだろうか。剣理の究明は、人間形成の

ための学習は。

剣道はひっきょうその人の人格の表現である。少・壮・老

の別なく広く深く学んで自己完成をめざす日々でありたいと

希う。

少而学

少にして学べば

則ち壯而有為

則ち壯にして為すあり

壯而学

壯にして学べば

則ち老而不衰

則ち老いて衰えず

老而学

老にして学べば

則ち死而不朽

則ち死して朽ちず

目次

巻頭言	1
わが郷土の剣豪紹介(各支部より)	8
劍豪 大島半作	13
道楽話「刀剣について」	16
私の二刀を語る	17
随想「剣道紀行」人間・沖田総司の魅力	21
人物紹介	24
剣道随想	30
剣道短歌『真心館』	31
徳島の剣道(各ハートからの報告)	33
全国優勝への道のり	34
全国教職員大会個人優勝をして	36
四国高校選手権大会で得たもの	37
インターハイに出場して	37
自分の中の壁	38
全国大会に出場して	38
高齢者武道大会等に参加して	39
幸運な七十八歳	41
全日本居合道大会	43
尾形郷一先生を偲んで	44
中村公一先生を偲ぶ	44
平成四年度各種講習会参加状況	45
平成四年度戦いの跡	46
平成四年度昇段者名簿	47
平成五年度剣道・居合道昇段審査学科試験問題・解答例	56
平成五年度徳島県剣道連盟役員・覧表	60
平成五年度徳島県剣道連盟行事予定表	86
平成五年度段級審査実施計画表	89
徳島県剣道連盟審査資格・審査科等	91
編集後記	93

△表紙▽

題字 堀江幸夫徳島県剣道連盟会長
写真 田村直一剣道連盟小松島支部長

東四国国体剣道大会小松島大会会場(小田浦橋)
剣士の姿凛々とホンボコ狸の心意気

わが郷土の剣豪紹介(各支部より)

〈小松島支部〉

素晴らしい剣風 蝦名久作先生の教え

小松島支部長 田村直



蝦名久作先生(小松島市大林町字鎌須三六)は「人となり健大雄偉、骨肉賢実、力数百斤を重しとせず、事に臨んで死を怖るゝことを知らず、尚福氣の相、豊かにありて、精神、力貌兼ね收む」。……七十歳間「剣道に精進鍛錬さる。

剣道界の素晴らしい達人。身心いままも嬰鏢、日夜東奔西走して青少年の健全育成、剣道の普及振興の為に努力精勵なされている行の人。私共の畏敬す

る師であり大先達であられる。

先生の剣道の哲理は、昔流行? した試合志向型の剣術に対して鋭い批判を加えられていたことで知られている。即ち竹刀を刀剣とする「真理探究」の業を追究せねばならないと、……静かに語られる真意は深く重たい。

「剣道は、専ら人に勝つことを学ぶものではあるが、結局は事に臨んで生死を明らめるものであって一心に邪なく、惑なく、心気が平らかであれば、自在に変に応ずることができる」と、というのが戦前先生の剣師であられた、北海道旭川市剣連の音喜多、原田、酒井(いずれも範士八段)の三人の師範の一致した剣理「得であった」。

かくして北海道で研磨された先生の剣は、格闘実践的でものすごく竹刀の業くらべと共に心の刃を磨くというものであった。したがって、先生に教えをうけた(昭和四十二年以来)私共は、稽古でいつものことながら先生の竹刀の剣尖からもえ放つ小さな輪のような光芒? に気おくれし、緊張しすぎ、恐、懼、迷してのち切羽つまって「何くそ」で打ち込む、とたんに竹刀は宙にとび、身はもんどりして床に倒れ伏しているという況で、みんな「ホウホウ」の態であった。

昭和四十二年に北海道から小松島の旧国策ハルフKKに転勤されて以来、小松島支部の顧問、剣道師範として新開剣道教室外四教室で多くの子弟を教導された。(尾崎行男、神原常経、樺福稔、田村直、加林恵祐、加林恵央、村崎光雄、田村嘉男、篠原誠、本田春、松田敏弘、松本次美等々)

いつもいわれたことは、坐学でなく、道場に立っての稽古にあると、技と理が分離しないように心掛けることが大事であると、そしてどんなときにも「誠実」に「温かく」教えて頂いているのである。

「先生の刀法を観ると、相手を斬り倒す完全刀法がそこにあり、カ猛烈果敢で打の剣術が観る人の心をひきつけ爽やかなものにしてくれる」と、いつか……

故人の「下村富夫先生」が話してくれたことを覚えている。

蝦名久作先生略歴(抄録)

大正四年樺太柏居町に生まれる。小学四年生の時より剣道を学ぶ。

昭和六年工業専修学校卒、玉子製紙KK落合工場に勤務。修道学院(江

尻、西原先生)にて剣道修行。

昭和十二年武徳会三段。応召(S13-15)北支各地を転戦。部隊の指揮班に属し隊長等の軍刀と共に戦陣にて活躍。

昭和十七年旭川市(旧国策バルブKK)に移り、旭川剣連の音喜多、原田、酒井(範上八段)の三氏に師事する。

昭和十八年四段、再び応召、終戦(北海道)。昭和二十八年五段、昭和三十三年六段、昭和三十六年教士称号、昭和四十三年七段。

昭和四十二年小松島田国策バルブKKに転勤、小松島支部顧問師範。昭和四十八年停年退職し、川崎市(日本触媒工場入社)へ転住。

昭和四十八年より昭和五十六年まで、神奈川県立青少年会館剣道専任指導員(兼務)を務める。

昭和五十六年日本触媒工場退職、小松島市に復帰以来今日まで専ら徳島県剣道連盟審議員等を歴任され、各地でご活躍された。

◎ 表彰 歴

昭和十年旭川連隊区武道大会樺太代表選手(個人三位)。

昭和十二年北支駐屯部隊下士官剣道大会に出場(入賞)。

昭和三十一年北海道実業団大会に於て優勝(大将出場)。

昭和四十九年神奈川大会に於て川崎市団体優勝(大将出場)。

その他高齢者全国大会に於て準優勝、第三位(三回)。

県内高齢者大会に於て優勝(団体、個人(二回))。

徳島県剣道連盟、並びに小松島市教育委員会、小松島市体育協会よりそれぞれ表彰される。

〔先生の言葉〕

これからの剣道志向の皆さんへ!

打の剣道が当てる剣道となっていたが、全剣連関係諸先生方の努力に依り正しい剣道に戻りつつあることは喜ばしい。剣道の理念に、必ず理法の修練に、誠実と忍耐の心掛けを忘れず精励し、有能な人間になってほしい。

〈徳島支部〉

劍豪一代記

金の星館長

松岡

清剣道七段錬士

徳島県剣道連盟徳島支部長 馬場 力



兄で武道家として勇名を馳せた先生とお聞きする。弟さんにも書道の大家後藤泰秀先生、またお身内に東京市ヶ谷の陸軍士官学校卒業、皇居警備隊、のちピルマへ派遣となり聯隊旗手を務めた元陸軍将校後藤利夫氏がおられる。

やがて旧制中学へ入学しここでも指導者に恵まれ剣道に明け暮れ、県下各地へ稽古相手を求め転々とする。当時の剣道は試合稽古よりも切り返しや打ち込み基本練習が喧しく言われていた感があると伺っています。そのうちに学業も終え農業のお手伝いをする傍ら、城山の武徳殿にて好きな剣道を継続す。その後、年齢的転換期?に。剣友と共に阿波藩貫心流の剣道をもとめて学ぶ。近江佐久郎範上、また流れを汲む先輩にもご指導を受ける。数年後何かの閃きがあったのか、水を得た魚の如く、更には剣の理合の追究、剣技の考案等に熱中一段と燃え悟りし頃、赤紙軍の召集令状が来る。昭和十三年に蔵本錬兵場四十三連隊入隊錦隊に所属。軍隊生活七年以上、転々となつたが貫心流剣道の特技を活かし各地方や高知練兵場にも土用稽古、寒稽古と汗を流し続ける。その時の先生の日振りでは、現在のようであって二剣道

でなく、実戦形で躰下丹田に力を入れ勇猛果敢突進打突気合十分捨身攻撃を主とした剣道であったのではと推考致します。軍隊での試合はすべて、本勝

負と聞いております。高知練兵場では先生の長身から振り下ろす電光石火の横面打、更に間髪を入れずの素晴らしい胴打に若い兵士達を戦慄せしめたものであったそうです。

今小生が思うに先生は昭和四十九年の春頃、練心館に入会、その時選哲を迎えつつあったのでしよう。娘が作ってくれたとエンジ色のカーディガンを着ておられニコニコしての笑顔を今でもハッキリ記憶に残っています。地味ではあるが人間的にも完成し、剣の道も玄妙の域に近づいておられたように感じます。昭和五十五年剣道六段合格、その二年位前より地元有志一団の要望で非年少防止運動、更には年少少女の健全なる心身の育成にと、市の働きかけもあり地元町民集会場を金の星と称し剣道道場に改築し結成。先生の厳しいご指導に耐えて、五〇名位の立派な門下生が卒業する。

昭和六十一年五月京都にて七段を受験、その折現在の剣道理事を務める小川本吉先生共々に受験、試合内容は応援する人が呻き、唸る、素晴らしい剣技を披露してくれ、驚嘆の極みであった。貫心流の奥儀離静誠位そのもの必勝の境地厳然たる構えに相手の先生方は技を出す事なく終わった。帰りの船の中で本吉によかったねと声をかけましたが、初心に帰ったつもりでお願いしたとの事で、初心不忘と唯一言を記憶しています。

先生は地道に剣道・筋に剣道の本質を活かしての努力を認められ、徳島県剣道連盟徳島支部より推薦され、徳島市体育協会より功績を称えて名譽ある表彰状を受賞され、更には市と町内一回より推挙され、

渭北福祉会館運営委員長 徳島市少年輔導協会役員
を任命され人生これからという時に平成二年三月十一日逝去、悲しみの涙が天に伝わったのか小雨の中、大勢の有志、剣友、子弟に見送られて静かに旅立つ。

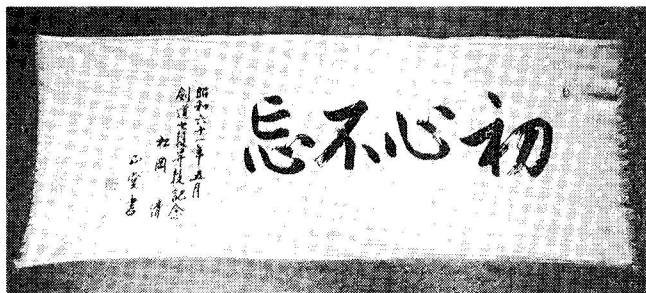
我も学び子弟も教えて五十年

教学・如剣の道を 桜花薫るさすらいの風と

共に今も静かに歩む先生

やすらかに おやすみを

合 亭



〈丹生谷支部〉

剣道教士 七段 西村武夫 先生

（大正十一年九月十二日生）

丹生谷五カ町村のうち那賀郡相生町日野谷地区は昭和初期、日野谷村といっていた。名だたる剣道の里で、平田部の立江町、大野村と並んで剣道の名門の村であった。西村武夫先生はこの日野谷村で生まれ育った。

日野谷村には、建武中興の忠臣新田義貞の舎弟義助の末裔といわれる新田密太七段教士の重鎮が居られた。大正十四年剣道三段の若き原貞一先生が日野谷小学校訓導として赴任してこれ剣道を始められた。熱心に教えられるので日増に年毎に盛んになった。そこへ昭和七、八年頃新進鋭駿秀の誉れ高かった岡久幸夫三段（阿南市見能林町岡久石油店岡久一雄氏の令兄）が赴任して来られ、一段と活気を呈し、当時日野谷小学校の名声は県下に冠たるものがあった。そして、その戦力の中心をなしていたのが西村武夫少年であった。

六年生の頃、原・岡久両先生に手ほどきを受くるや、天賦の才はめきめき上達し高等科二年の頃には界隈で無敵になっていた。高等科卒業後、上阪し大阪陸軍造兵廠技能者養成所に入所、ここで第二の剣道の師五段丹波莊一郎先生に就き三年間稽古の鬼となり錬磨の朝夕を過ごした。この三年間で技は一段と飛躍し大人の剣になった。

昭和十八年熊本整備教育隊に入營し、やがて支那派遣遺軍とし中支へ出征、飛行機整備兵として各地に転戦、時には桂林まで行った事もあるそうだ。昭和二十年終戦、翌二十一年復員し、久し振りに故郷日野谷村に落着き、結婚して二子を儲けた。

昭和二十六年頃、鸛敷町百合に住む山家雪藏先生の誘いにより再び竹刀を持った。それより山家先生を師とし先生を助け戦後の物資乏しき中、防具竹刀の調達に苦勞しながら日夜精進を重ね大成して行った。昭和三十三年鸛敷町百合に振武館成るや館長山家先生の片腕として剣道の普及と錬成につとめた。寒稽古、上用稽古には遠く平島、加茂谷、新野からも合宿に参加し延べ

数百人の青少年の指導錬成は大変であった。西村先生は何時も率先、汗の稽古着をしぼれた程だった。また、西村先生は剣道形の指導が上手で、形はいつも教えていた。

その後、日野谷公民館を龍虎館とし、藤本・西浦先生と共に日野谷村剣道向上につとめ、また、相生町全域に亘り指導に東奔西走し稽古熱を高めた。

昭和三十五年六段、昭和三十八年教士、昭和五十八年七段と進んだ、西村先生の剣風は端正にして流麗、のびのびした面打ちは定評あり、その技の巧みに魅了したものだ。

昨年高齢者剣道大会で準優勝に輝き、平成四年剣道連盟創立四十周年を記念して県連会長より表彰を受けたのも宜なる哉である。

現在徳島県剣道連盟理事の要職にあつて後輩の指導に専念されている。

〈海部支部〉

中山 啓 男 （剣道教士七段 徳島至誠館長）

剣道連盟相談役 平岡 竹雄

日和佐町北河内内で農業兼土木建設業を営む中山権太郎の六男として昭和五年に生まれる。

教員を志して、徳島外国語高校から松山外大英米語学校を卒業。二十四歳で英語教師となり阿南市椿町中学校へ赴任した。昭和三十六年に故郷日和佐中学校に迎えられる。ここで剣道六段の平岡教頭と出逢い肝胆相照らす仲となる。この時は剣道を学ぶ暇なく、「専門の英語の勉強に米国に留学」の悲願に燃えていた。県教委の許可があり、妻子を親里に託し決然と渡米留学した。昭和三十七年八月である。以後二年間、苦学力行し貴重な教学の体験を得て帰国復職した。数年たち昭和四十一年再び日和佐中に帰任となり、以後九年間勤める。翌四十二年から、平岡・張野教士や同僚の大橋先生から剣道の手解きを受け、剣道の素晴らしさに魅せられたという。三十七歳の時で、一年後に剣道初段に早くも合格した。昭和四十五年から日和佐中学の剣道部

長となる。天性の運動神経と燃える気魄で生徒を教え、自身も猛稽古教学一
体であった。折よく日和佐小学校に日和佐スポーツ少年剣道部が生まれ、
平岡校長が初歩の指導をして中学へ送る。中山先生が精銳に鍛える連係が数
年続く。日中剣道の黄金期は昭和四十九年で、県中学校選手権大会で優勝、
全国大会で勝ち進み、「ベストエイト」に輝く快挙があった。このメンバー
達は、多く水産高校で福井軍二教士の指導で県大会団体、個人総合優勝の中
心となった。「能く学ぶ者にして能く教える」と言う。

中山先生は昭和五十年に五段、昭和五十六年六段、そして昭和六十二年五
月剣道七段の合格である。剣を学びはじめて、近々二十二年間で到達した。
愛汗錬武の成果として敬意を表したい。一方教職の方も、七段受領と同年に
故郷に錦を飾り日和佐中学校長に栄転した。五回目の奉職である。教育者と
しての人望と手腕が評価されたと思う。平成二年三月定年退任された。海部
郡高齢剣友会に先生を入れて五人が揃った。平成三年度県高齢者大会団体の
部で海部郡優勝の喜びを共感した。昨年も六十歳代で先生は個人優勝の栄冠
に輝く。

海部郡支部長二年間も燃える情熱を傾注しリーダーシップを発揮された。

平成二年から日和佐町社会教育委員長の奉仕がある。

将に剣道に教育に立志伝中の人物と言うべきである。昨春秋から那賀郡
羽ノ浦町に近代的な剣道場徳島至誠館を開設され、また、英語教室至誠塾も
経営されている。

海部郡から直接のお別れは寂しいが、発想を新たにすれば、先生は新居で
二世代が同居、団欒が叶えられ、出藍の誉れ高き繁輝君と親子相伝の今日的
な育英事業に専念される現況を私共も祝福すべきだと思う。先生を育んだ日
和佐の山河も車で半時間の行程、折々は帰省して旧情を温め、ご指導を戴き
たい。

徳島至誠館の名実共に御降昌を祈る。

〈阿波支部〉

佐藤吉邦教士 七段

(阿波郡市場町大字八幡字町居敷二三 昭和二十七年三月五日生)

徳島県剣道連盟阿波支部長 坂本裕 一一

氏は阿波支部に育った近年にない若手剣士の中で環境、家庭、職業、体力、
剣技、総てに恵まれた逸材である。

氏の生まれた市場町八幡地区は古来より剣道の盛んな地区で近郷にない大
きな社殿を持つ八幡神社があり、広い拝殿は道場として最適であった。その
拝殿を八幡社道場と名付け戦後間もなく、他処では余りしておらない時から
同好士達の修練の場とし、この道場には幾多の剣士が機会ある毎に集まり技
を磨き体力を鍛えた。その結果この道場から数多くの高段剣士が輩出した。
氏は居宅がこの八幡神社の近くにあったので毎日のように響く竹刀の音がよ
く聞こえ、幼少の頃より道場の稽古を見て育って剣道への関心が非常に強かっ
た。八幡中学校へ入学と同時に剣道部に入学して地元坂本裕二教士や、当時
八幡中学校教員として勤務していた那須彬教士に剣道の手解きを受け修練に
励んだ。その後阿波高等学校に入学し、出口嘉平先生の指導を受け益々技能
を磨き実力を高め阿波高等学校剣道部の黄金時代を築いた。卒業後家業継承
のため、京呉服の商店に就職し経営と実務の習得に励んだ。その後帰郷して
家業を継ぎその余暇に剣道修練に精進した。その結果若手剣士の実力者とし
て成長し、ついに平成三年五月京都での昇段審査会でただ一度で見事難関で
ある七段に合格した。

その間全日本都道府県対抗剣道大会に徳島県代表選手として二回出場した。

昭和五十八年より平成二年まで市場剣道教室二代日室長として教室の運営と
指導に専念し幼少の健全な育成と技術の向上に尽くした。更に市場中学校
剣道部講師として迎えられた。多忙な家業の傍ら部員の技能向上のため鋭意
努力し「剣道市場」の名声を県内外に轟かした。特に北海道の昭和六十年全
国中学校選抜剣道大会には「ベスト8」になり、福井県の平成四年全国中学

校選抜剣道大会にも徳島県代表として出場し活躍した。これらの成績は氏の卓越した指導力によるものである。

現在剣道連盟審査員となり昼は中学校剣道部、夜は剣道教室の指導と全く獅子奮迅の活躍である。今後自重自愛され「原土の里」の伝統のある市場の剣道を益々発展さすことを願って止みません。

〈美馬西支部〉

剣道錬士 大川 一

美馬西支部 北岡 健治

大川先生は昭和三年四月六日、澄んだ水と冬の冷え込みが磨きを掛ける素麵で知られる半田町で大川家の長男としてお生まれになりました。

昭和二十年三月北京中央鉄路学院機務科を卒業され、同年四月から翌年十一月まで国鉄職員として職務に励まれました。昭和二十三年六月から昭和四十三年二月の間半田町吏員、同年十二月より設立されたばかりの美馬西部消防組合の幹部職員として活躍されました。

当時の美馬西支部では、大川先生と青年時代によく剣を交え稽古に熱中した仲であった現在支部長の佐藤藤太先生が指導する貞光町子供会連合会剣道部の教室だけでありました。当時、大川先生は熱心に教室に向向かれ剣士達の指導に励まれていました。

昭和五十二年八月には消防職員の資質の向上と体力の増強を図るため、先生自らのご努力により署に剣道を取り入れ全職員（三十六名）に普及徹底され、自ら指導に尽力されました。翌年の四月には先生の紹介により今は亡き教士滝下勝先生を講師にお招きし週三回の稽古日程でご指導を受けました。両先生のご指導のかいあって全職員が居合道・剣道ともに有段者となることができました。これは先生の剣道を愛する心が全員に通じた故と全職員等しく評価するところであります。

昭和五十五年四月には、先生の剣道に対する一途の思いが地域住民の心を

揺り動かし念願の半田町小野子供剣道教室を創立なされました。この際、先生のご尽力により地域の有志の方々から寄付を頂き剣道具を取り揃える等、地域に剣道の種を蒔くべく努められ少年剣士育成の為に万全を期する配慮を施されました。このかいあって生徒も日ましに増え、また近隣の有段者も先生の剣風とその人柄に引き寄せられ夜遅くまで稽古に取り組まれご指導をされました。先生のご努力が地域の子供たちに剣道と触れ合う機会を設け子供たちの活動の一環として選択せしめる現状を築き上げたことは先生に教えを受けたもの一人として誠に喜ばしいことであると感じています。

このように剣道に対し心から愛し尽くされた先生も美馬西部消防組合消防長に在任中病に倒れ、平成二年三月二十三日ご家族に見守られ六十一年間のお世話になりました。今日の私があるのも先生のたゆまぬご指導のおかげと感じています。今回、私の様な若輩者が先生を紹介させて戴くのは御無礼かと思ひながら感謝の気持ちを込めてペンをとらせて戴きました。



〈丹生谷支部〉

松本 繁嗣 (四十六歳 六段 豆腐製造業)

丹生谷支部 雄 西 義 春

氏は、現大和錬心館館長教士七段松本英雄先生の長男として昭和二十一年木頭村出原に生まれる。

剣道の始まりは小学五年で、現木頭村教育委員長田中優先生に、防具は着用しないで、基本をミッチリ仕込まれる。

中学になり、小原亭先生に本格的な厳しい指導を受ける。昼間の学校だけの稽古にあき足らず、夜は大和錬心館に通い、大澤善二郎先生の下、大人に交じって猛練習に堪える。

高校に進んでは(徳農)下村富夫・山田仁両先生の御指導を受け、一心不乱に稽古に励み選手として大活躍をする。今も時に見せる突技に下村先生を髣髴とさせるものがある。

更に国士館大学に入り、下村先生の師でもある、小野十生先生に師事。剣道への情熱は益々燃え血の出るような修練の日々でしたが、突如襲った病魔には勝てず、三年半ばにして中退止むなきに至る。氏の無念さは察するに余りある。

昭和四十四年社会人となってからは徳島錬心館に入門、館内の一隅なる一部屋に寝泊りをし、昼間は会社に勤め夜は大澤善二郎先生に剣道を教わり、益々心技に磨きをかける。正に氏の自主的な人生(仕事と剣道)が始まる。

昭和四十八年に木頭に帰り家業に励む。四十九年結婚し現在子供さん三人の父親である。五十六年には豆腐屋さんを開業。帰郷後も剣道の修行は怠らず、五十八年には二十六歳にして六段に合格。

氏は天性の純粹な心を持ち敏捷性に優れ、多くの本を読み、研究熱心では類を抜いている。

常は口重い方であるが、こと剣道談義になると日は輝き、時のたつのを忘れ話は尽きることがない。

そして現在丹生谷支部の木頭支所長であり、木頭の剣道に大変な尽力をしている。氏に期待する処誠じまことに大である。

仕事と剣道を離れての氏の一番の趣味と言えは釣りである。それも川漁で、中でも得意とするのはアメゴのトバセ(毛針)釣りである。三月一日の解禁を直前にし、氏の胸はトキメキ、アメゴの姿影が去来しているに違いない。腕は名人級である。

目下の処京都審査に向けて精進中である。

劍豪 大島半作

阿波支部長 坂本裕二

幕末から明治にかけて心形刀流の達人で、大日本武徳会徳島県支部創立に大きな功績のあった半作は麻植郡大字字兒島須賀（現在川島町善入寺島）の人で名は信行字仲敏、半作は通称で号を龍淵という。（資料一）天保二（一八三一）年隣接する阿波郡香美村字藤太夫須賀（現市場町善入寺島市場区二六）の「原土目付」で心形刀流の道場佐藤五郎兵衛篤信劍号常寛子の二男として生まれ、文久二（一八六一）年家農大島嘉兵衛の養子となった。氏は幼少の時から父篤信から剣道の手解きを受け、長じて兄坂三郎信尹と同様江戸に出て伊庭道場入門、伊庭軍兵衛秀業について修業を積み安政三（一八五五）年印可を許され、さらに心形刀流最高の栄誉である表徳号「常雄子」の称号を許された。大島家を継いでからは、江戸昌平校に学んだ板野郡泉谷の学者赤松藍州を招聘して漢学の私塾を開き、自己も勉強した。藍州無養に去った後も昌平校出身の麻植郡川田村の佐藤香雪を呼び塾を継続した。



資料一

兄坂三郎の劍の道場と共に善入寺島民の子弟や近郊の人々に文武の道を教え阿北の住民の誘導感心に努めた。

氏は子がなかったので兄坂三郎の二男寛太郎を養子に迎えて家業を譲り、晩年徳島市伊賀町の富田八幡神社前に三百坪の土地を求めて、ここに居を構え大日本武徳会徳島支部の設立に専心した。

明治二八（一八九五）年桓武天皇の平安遷都一千年に当たり、平安神宮が創設された。これを機に大日本武徳会本部を京都に設立し、各府県に知事を長とする支部を創立されることになった。この支部設立に当たり半作はその組織作りに関与して日夜奔走し、最も困難であった基本財産作りを率先して莫大の自己資産を投じ、同志と共に財源を確保し、明治三二（一八九九）年二月開会式並びに演武大会を開催することができた。（資料二）

武徳会徳島県支部成立こそは近世徳島剣道の基盤構築であり、この基盤は大島家の財力と半作の努力、また佐藤道場一門の剣技、物心両面の支援により築かれたというも過言でなからう。（資料二）

大島家は屋号を全という麻植・阿波両郡に百余町歩の田畑を有し三百余年の伝統を持つ豪農で、その邸宅は（資料四）麻植郡宮の島村、麻植郡字島村、阿波郡香美村の二郡三カ村にまたがり「須賀の大島城構え」と歌に歌われる程であった。家業は藍作を主体にし、これを加工して藍を製造し徳島市西船場町に支店を置き九州・四国方面にその売り場を持った。また、西船場春日橋付近では酒造業を営み、県下屈指の豪商でもあった。（資料五）

大島家は信仰心が厚く各地の神社、仏閣の世話人となり、多額の浄財を寄附した。讃岐金毘羅宮の神事場の「鞆橋」は同家の寄進によるものであるという。また市場町は古来より雨量が少なく、夏の渇水期には飲料水にも事欠く有様で、農民は毎年旱魃に苦しんだ。大島家では文政九（一八二六）年藩に願い出て日開谷川の地下水を引き、銀七十貫、およそ九百両を投じて独力で大島用水を開鑿し、五十六町余の水田の灌漑に成功した。半作は明治十（一八七九）年二月より同十四年まで地区の人々に推されて県会議員になり県政に貢献し、第八十九銀行の「頭取」に推されるなど県下の政治、経済、文化の各方面に活躍した。（資料六）

大正三（一九一四）年吉野川改修工事のため善入寺島は遊水地となり、全

戸立ち退きを命ぜられ「城構え」と言われた豪邸も取り壊され、徳島市徳島町堀川前七百坪の屋敷に移住しておったが、昭和二十年七月三日の戦災により、記録その他家財総て灰燼に帰した。

半作は明治四三（一九一〇）年八月八日七十八歳で病没し、

常淳院殿雄懷龍淵居士として葬られた。（資料七）

大馬家の歴代の墳墓は善入寺島にあったが、家居諸共立ち退きのため麻植郡川島町大字宇二つ森東の善入寺島が、跳出来る高台に移転した。この広大な墓地に佇むと一繁栄した大島の往事」が偲ばれる。

後記

徳島の剣道一に心形刀流佐藤一門の事、回記載して紹介しましたが、この資料は原上佐藤政三郎の後裔故佐藤李太郎先生が生前小生に賜った御教示、佐藤李太郎先生の御弟様で伊勢原市でお住みの当年九十六歳であるが、嬰鏢としてお元氣、若い時心形刀流で鍛えられ古武士の面影を持っておられる佐藤彦三郎先生の毎々の御教示、徳島市の佐藤李太郎先生の御曾子正臣氏並びに板野郡吉野町原上の後裔故井後哲男氏の門外不出の貴重な資料の提供を賜り拙文ではあるが書くことが出来ました。

明治三十二年二月廿六日大日本武徳會徳島支部開會式劍槍組合

審判員	大島 半作	井後 哲五郎	井後 哲五郎	井後 儀三郎	大島 寛太郎
選士	井後 祐信	井後 守信	井後 儀三郎	大島 寛太郎	

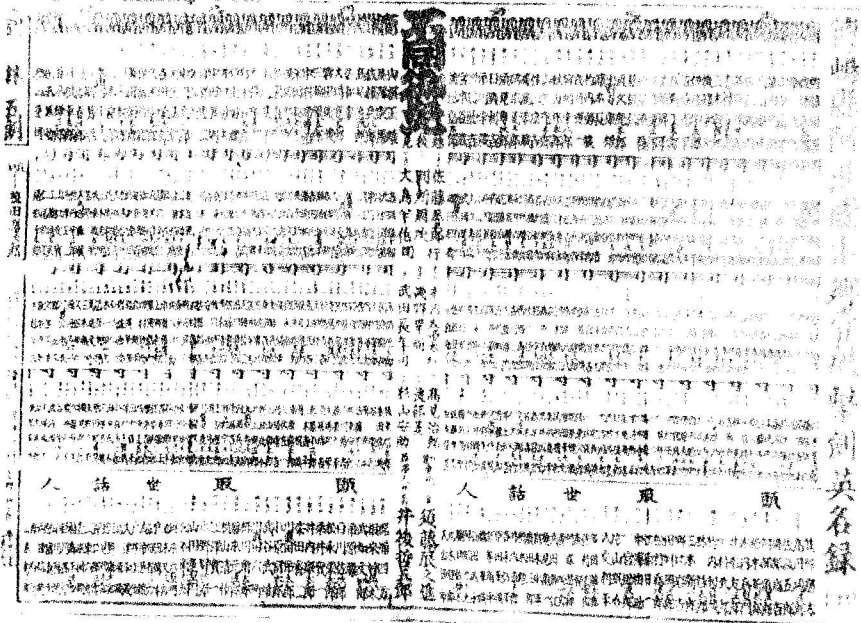
演武大会のプログラム

心形刀流形 大島 半作 井後 哲五郎

審判員 大島 半作 井後 哲五郎

選士 井後 祐信 井後 守信 井後 儀三郎 大島 寛太郎

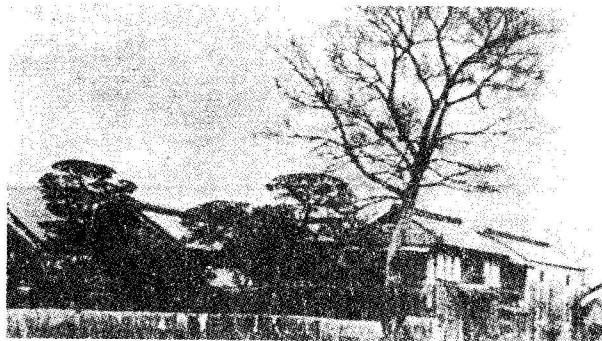
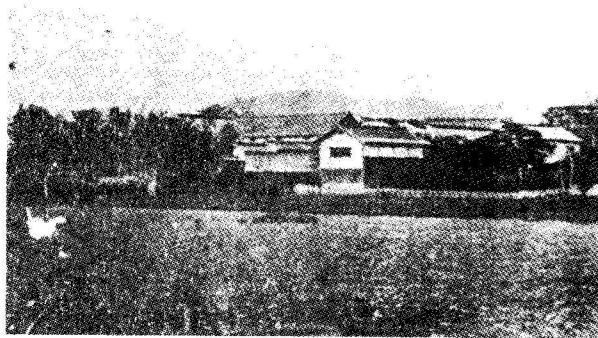
資料二



須賀の大島城構え 著者 須賀道也氏 明治18年 1885

後見役	佐藤 照三郎	大島 半作
西前頭	大島 寛太郎	
心形刀流	佐藤 門の面々	
差添人	井後 晋五郎	

資料三



「須賀の大島城構え」とい
われた大島邸

資料四

文化七年藍製造家一五二〇名中、西の大関大島源左工門

阿		南		北		名		家		持		九		魁		勸	
御免行																	
折目後之助																	
差添人多田宗奈																	
後見																	

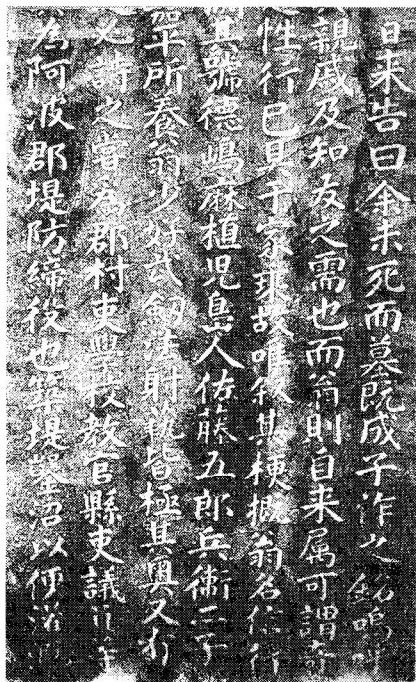
資料五

西の頭取大嶋半作 (徳島県の経済界でも活躍)

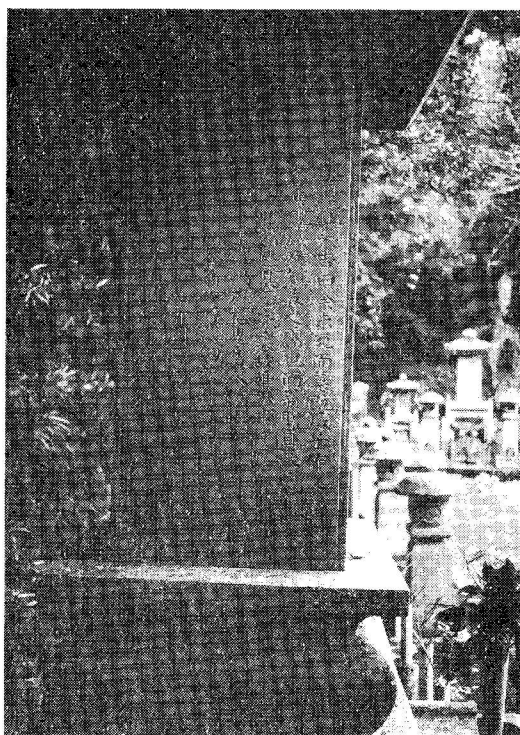
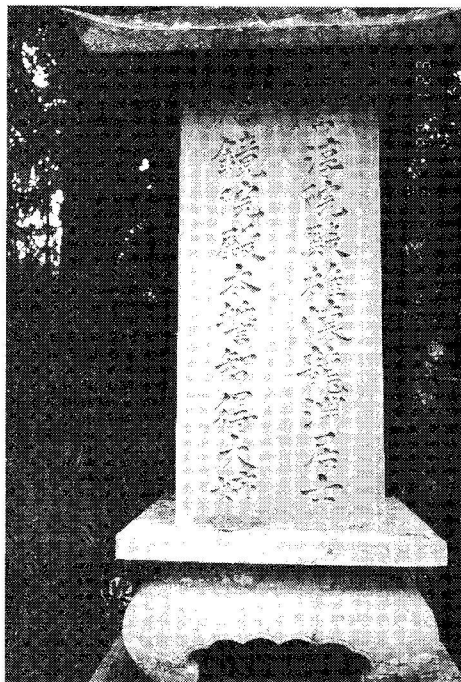
西												東											
藤原鏡																							
多田宗奈																							
行銀同業																							
馬儀一																							
元友成彦																							

繁栄見立鏡 明治15年9月 三木与吉郎氏蔵

資料六



半作法号
 常淳院殿雄懷龍淵居士
 心鏡院殿本誓智得大姉
 半作室徳子の法号



大島半作の墓碑 岡本斯文撰並書

麻植郡川島町大字字二つ森東高台の
 広大な墓地

道楽話「刀剣について」

徳島県剣道連盟監事 阿波支部 笠井 選

まえがき

長い歳月の道楽を知られてか、よく「かたな」について質問されたり、また相談をうけることが多いが、相当な知識人である筈の方々でも全く無知と思われる内容である事が多い。

思えば僅か一握りの人々にしか興味のない前世紀の遺物でもある「かたな」であれば、現代の特に若い方々にとっては、また当然な事であろう。

しかしひるがえってみるに、剣道形では模造ながらも形態はそのままの刀を用いているし、特に居合ではしばしば「真剣」と称する、刀工の鍛造した刀を使用していれば、剣道または居合と刀とは、全く無縁の物でもないので、常識的な事を極く簡略に書いてみようと思った次第である。

本 論

種 類

刀剣と総称されるものには、
(1)太刀、(2)打刀、(3)脇差、(4)短刀、(5)槍、(6)なぎなた、(7)長巻、(8)鉾(剣)を含んでいるが、「かたな」といえば普通は(1)と(4)を指している様である。

(以下寸法は故意に尺寸で表記する。)

① 太刀(大知・横刀・大刀)
主として南北朝期以前に作られたもので、(現代刀匠も多く作っているが)騎馬戦に用いられた為に長大で反りは深くほとんどが二尺四五寸以上はある。ただし、二尺一寸前後の小太刀もあるが、これは儀式用か、又は公卿や高級武士の子供用のものである。太刀は差すものではなくて、刃を下にして佩くものである。

② 刀(打刀)
二尺以上で大体二尺二寸〜四寸位が定寸とされているが、まれに二尺五寸以上のものもある。太刀に比して、反りは浅く、刃を上にして差す

もので、室町期以後に多い。

但し、後代に長い太刀を磨り上げて寸法を縮めて、刀としたものが古い物には多い。

③ 脇 差

寸法は一尺以上二尺未満で、ほとんどが室町期以後の作で武士が二本差になってから製作されている。これも南北朝期以前の太刀を磨り上げて寸法を縮め、脇差とした古い物も多い。

江戸時代になり町人の経済的繁栄に伴って、この需要によって、生ぶの物では、江戸期の物に名作、名品が多い様である。

④ 短刀(小刀・腰刀)

寸法は一尺以下で普通は八寸前後であるが、まれに一尺を僅かに越す一寸延短刀といわれるものもある。

江戸期にはほとんど作られていないが、幕末になり幾分製作されている。鎌倉期の物に名品が多い。

⑤ 槍
小説でよく、「合口」と称しているが、これは鑢を着けない拵(作り)から来た名称と思われる。

形状等説明するまでもないが、上代の鉾の変形で長短様々である。南北朝時代に足輕の出現によって登場したといわれている。

⑥ なぎなた(薙刀・長刀)

鎌倉時代末期から作られた。鶴首形で、横手がない。

⑦ 長 巻
なぎなたとよく似た形で混合されているが、非常に長く、前者と違って横手がある。ほとんどが鎌倉末期から南北朝期のもので、刀に改造されて現存している物も多く、これを「長巻直し」と称している。

⑧ 鉾(ほこ)(劔)
反りはなく槍の様な形状で神器、又は儀杖用のみ。

以上が刀剣と総称されている物の区別である。
刀剣の時代的変遷
刀剣も、時代と共に形質共に変化しているが、その推移を極く簡略に書

いてみる。時代区分は年号、年次で明確に区分出来るものではないが、便宜上年号の初年より末年までとした。正史と幾分の差のある事を、お断りしておく。

(1) 上古刀（古代―奈良朝期）〇〇八〇〇年

直刀時代

(2) 古刀

(イ) 平安朝期（大同―壽永）八〇六〇―一八三年

中期より反りの深い細身で、長寸の太刀姿となる。

(ロ) 鎌倉時代前期（元暦―承久）一一八四―一二二一年

貴族的から武士的な豪壮な姿となる。

(ハ) 鎌倉時代中期（貞応―弘安）一二二二―一二八七年

反り浅く、広く、厚く、より豪壮な姿となる。

相州正宗の時代。

(ニ) 鎌倉時代後期（正応―元弘）一二八八―一二三三年

長寸、重ね薄く、焼き幅広くなる。

相州鍛冶の全盛時代。

(ホ) 南北朝期（建武―明德）一二三四―一二九三年

実用本位の粗悪品が多くなる。

所謂太刀と言われる物。

(ヘ) 室町時代前期（応永―文正）一三九四―一四四六年

寸詰りで、小切先の差す刀となる。脇差しが作られる。

(ト) 室町時代後期（応仁―文祿）一四六七―一五九五年

戦国時代の為、「数打ち物」といわれる粗製品が多く、現存の古刀

はこの時代の物が多い。

(3) 新刀（慶長―享和）一五九六―一八〇三年

(イ) 慶長新刀（慶長―寛永）一五九三―一六四三年

切先伸び、豪壮な姿。

(ロ) 寛文新刀（寛文中心）一六六〇―一六八〇年

反り浅く、元先の幅の差は大きく、一見して区別できる。

長曾根虎徹・津田助広の時代。

(ハ) 元禄新刀 一六八八―一七〇三年頃

姿も刃紋も派手で、きれいな物。

江戸時代は各大名の城下町の発展、各地刀工の召抱えにより古刀時代と違って地方的特徴が少なくなる。

(4) 新々刀（文化―慶応）一八〇四―一八六七年

長寸で反り少なく、幅広く、重ね厚く重い実用品。地肌は無地風で鑑別し易い。

(5) 現代刀（明治―）一六六八年―

明治九年の廃刀令により衰微。

昭和十二年頃より軍力ブームでの昭和刀、満鉄刀の粗悪品が出る。

昭和二十八年より登録刀工のみ、一カ月二振まで作成可。現代刀工約三百名。

重要無形文化財として、月山貞一、隅谷正峯の二氏。（人間国宝）

三 刀工及び位列

古刀期より現在まで明確に判名しているだけでも三方名は越すであろう。

川口陟著の「刀工総覧」に記載されているのは三方名近いと思われる。それらの刀工を現代工は別として、作位（技量）によって、

(イ)最上作、(ロ)上々作、(ハ)上作、(ニ)中上作、(ホ)中作と、藤代刀工辞典では分類している。

また、刀剣一振一振その物には、次の指定がある。

(イ)国宝、(ロ)重文、(ハ)重美（現在この制度はないが、従前指定の物はそのまま）、(ニ)特別重要、(ホ)重要、(ヘ)特別保存（特別貴重）、(ト)保存（貴重）の別がある。

四 銘（切銘）

一般に、最も興味を持たれるのが銘である。そこそこの家、また美術店頭で見られる一流上の銘は、失礼ながらもまず一応疑っても良いといっても過言でなからう。相当なコレクターの所持品にも偽物が多いし、徳島県の文化財（県文）として指定されている物にも何振か偽物があるとの事である。

普通、銘は太刀を佩く外側、刀または脇差は差す外側に切るので、太刀

道楽話「刀剣について」

徳島県剣道連盟監事 阿波支部 笠井 選

まえがき

長い歳月の道楽を知られてか、よく「かたな」について質問されたり、また相談をうけることが多いが、相当な知識人である筈の方々でも全く無知と思われる内容である事が多い。

思えば僅か一握りの人々にしか興味のない前世紀の遺物でもある「かたな」であれば、現代の特に若い方々にとっては、また当然な事であろう。

しかしひるがえってみるに、剣道形では模造ながらも形態はそのままの刀を用いているし、特に居合ではしばしば「真剣」と称する、刀工の鍛造した刀を使用してれば、剣道または居合と刀とは、全く無縁の物でもないので、常識的な事を極く簡略に書いてみようと思った次第である。

本 論

一 種 類

刀剣と総称されるものには、

- (1)太刀、(2)打刀、(3)脇差、(4)短刀、(5)槍、(6)なぎなた、(7)長巻、(8)鉾(劍)を含んでいるが、「かたな」といえば普通は(1)~(4)を指している様である。(以下寸法は故意に尺寸で表記する。)

① 太刀(大知・横刀・大刀)

主として南北朝期以前に作られたもので、(現代刀匠も多く作っているが)騎馬戦に用いられた為に長大で反りは深くほとんどが二尺四・五寸以上はある。ただし、二尺一寸前後の小太刀もあるが、これは儀式用か、又は公卿や高級武士の子供用のものである。太刀は差すものではなくて、刃を下にして佩くものである。

② 刀(打刀)

二尺以上で大体二尺二寸~四寸位が定寸とされているが、まれに二尺五寸以上のものもある。太刀に比して、反りは浅く、刃を上にして差す

もので、室町期以後に多い。

但し、後代に長い太刀を磨り上げて寸法を縮めて、刀としたものが古い物には多い。

③ 脇 差

寸法は一尺以上二尺未満で、ほとんどが室町期以後の作で武士が二本差になってから製作されている。これも南北朝期以前の太刀を磨り上げて寸法を縮め、脇差とした古い物も多い。

江戸時代になり町人の経済的繁栄に伴って、この需要によって、生ぶの物では、江戸期の物に名作、名品が多い様である。

④ 短刀(小刀・腰刀)

寸法は一尺以下で普通は八寸前後であるが、まれに一尺を僅かに越す「寸延短刀」といわれるものもある。

江戸期にはほとんど作られていないが、幕末になり幾分製作されている。鎌倉期の物に名品が多い。

小説でよく、「合口」と称しているが、これは鑢スガを着けツケない拵ツクリ(作り)から来た名称と思われる。

⑤ 槍

形状等説明するまでもないが、上代の鉾ホウの変形で長短様々である。南北朝時代に足軽の出現によって登場したといわれている。

⑥ なぎなた(薙刀・長刀)

鎌倉時代末期から作られた。鶴首形で、横手がない。

⑦ 長 巻

なぎなたとよく似た形で混合されているが、非常に長く、前者と違って横手がある。ほとんどが鎌倉末期から南北朝期のもので、刀に改造されて現存している物も多く、これを「長巻直し」と称している。

⑧ 鉾(ほこ)(劔)

反りはなく槍の様な形状で神器、又は儀杖用のみ。以上が刀剣と総称されている物の区別である。

二. 刀剣の時代的変遷

刀剣も、時代と共に形質共に変化しているが、その推移を極く簡略に書

いてみる。時代区分は年号、年次で明確に区分出来るものではないが、便宜上年号の初年より末年までとした。正史と幾分の差のある事を、お断りしておく。

(1) 上古刀(古代—奈良朝期)〇〇八〇〇年

(2) 古刀 直刀時代

(イ) 平安朝期(大同—壽永)八〇六—一一八三年

中期より反りの深い細身で、長寸の太刀姿となる。

(ロ) 鎌倉時代前期(元暦—承久)一八四—一二二一年

貴族的から武士的な豪壮な姿となる。

(ハ) 鎌倉時代中期(貞応—弘安)一二二—一二八七年

反り浅く、広く、厚く、より豪壮な姿となる。

相州正宗の時代。

(ニ) 鎌倉時代後期(正応—元弘)一二八—一三三三年

長寸、重ね薄く、焼き幅広くなる。

相州鍛冶の全盛時代。

(ホ) 南北朝期(建武—明德)一三三四—一三九三年

實用本位の粗悪品が多くなる。

所謂太刀と言われる物。

(ヘ) 室町時代前期(応永—文正)一三九四—一四四六年

寸詰りで、小切先の差す刀となる。脇差しが作られる。

(ト) 室町時代後期(応仁—文祿)一四六七—一五九五年

戦国時代の為、「数打ち物」といわれる粗製品が多く、現存の古刀

はこの時代の物が多い。

(3) 新刀(慶長—享和)一五九六—一八〇三年

(イ) 慶長新刀(慶長—寛永)一五九三—一六四三年

切先伸び、豪壮な姿。

(ロ) 寛文新刀(寛文中心)一六六〇—一六八〇年

反り浅く、元先の幅の差は大きく、一見して区別できる。

長曾根虎徹・津田助広の時代。

(ハ) 元禄新刀 一六八八—一七〇三年頃

姿も刃紋も派手で、きれいな物。

江戸時代は各大名の城下町の発展、各地刀工の召抱えにより古刀時代と違って地方的特徴が少なくなる。

(4) 新々刀(文化—慶応)一八〇四—一八六七年

長寸で反り少なく、幅広く、重ね厚く重い実用品。地肌は無地風で鑑別し易い。

(5) 現代刀(明治—)一六六八年—

明治九年の廃刀令により衰微。

昭和十二年頃より軍刀ブームでの昭和刀、満鉄刀の粗悪品が出る。

昭和二十八年より登録刀工のみ、一月二振まで作成可。現代刀工約三百名。

重要無形文化財として、月山貞一、隅谷止峯の二氏。(人間国宝)

三 刀工及び位列

古刀期より現在まで明確に判名しているだけでも三万名は越すであろう。

川口陟著の「刀工総覧」に記載されているのは二万名近いと思われる。これらの刀工を現代工は別として、作位(技量)によって、

(イ)最上作、(ロ)上々作、(ハ)上作、(ニ)中上作、(ホ)中作と、藤代刀工辞典では分類している。

また、刀剣・振・振その物には、次の指定がある。

(イ)国宝、(ロ)重文、(ハ)重美(現在この制度はないが、従前指定の物はそのまま)、(ニ)特別重要、(ホ)重要、(ヘ)特別保存(特別貴重)、(ト)保存(貴重)の別がある。

四 銘(切銘)

一般に、最も興味を持たれるのが銘である。そこそこの家、また美術店頭で見られる。流工の銘は、失礼ながらもまず一応疑っても良いといっても過言でなからう。相当なコレクターの所持品にも偽物が多いし、徳島県のカultural財(県文)として指定されている物にも何振か偽物があるとの事である。

普通、銘は太刀を佩く外側、刀または脇差は差す外側に切るので、太刀

と刀（脇差）とは、銘の所在は反対となる。ただし、備中青江派の太刀、肥前忠吉一派の刀は、共に反対に切っており、阿波の氏吉の刀身の切銘は、他に見られない珍しい物である。

また親子、兄弟、子弟と何代も同一銘がある。例えば肥前忠吉は九代まで（但し、二代は終生忠広銘）。関兼元は有名な孫六（二代兼元）を初め十二名いた。最も多いのは、備前長船祐定で、古刀期四十五名、新刀期三十二名で、単に祐定であれば個名ではなく工房（会社）銘であったのではないかといわれている。

古刀期には少ないが（僅か三名とか）、新刀期になると、〇〇大掾△△守と受領銘が多くなるが、必ずしも名工、名刀とはいえない。

また親子、師弟等に関係なく同一銘は多い。

例えば超一流銘では、

(イ) 宗近 山城三篠二名をはじめ、古刀六名、新刀数名。

(ロ) 宗吉 古刀二十三名、新刀九名。

(ハ) 正宗 相州正宗はじめ、全国に古刀十三名、新刀二名。

(ニ) 長光 長船七名はじめ、他に十名余。であれば、宗近や正宗銘の駄作があったとしても、三篠宗近、また相州の正宗と見なければ一概には偽銘とは断じ難いであろう。

五 史伝・俗説・小説での刀剣（余話として）

千年に及ぶ刀剣であれば、これにまつわる実説も虚説も多いがその代表的の？ともいうべきもの。

(1) 伯耆安綱

源頼光の酒呑童子、また渡辺綱の羅生門の鬼の手切りで名高い、童子切安綱として国宝の外、在銘刀が五振ある。

(2) 村正

たたるとか、妖刀といわれているが、これは徳川家に次の史実がある為といわれている。

(イ) 家康の祖父、清康が斬殺された。

(ロ) 父広忠が大怪我をした。

(ハ) 家康が自己の不注意で槍で受傷。

(ニ) 長子三郎信康が信長により切腹させられた際の介錯人、天方山城守の佩刀が、いずれも村正作であったが、これは村正が伊勢であった為、当時三河付近の豪族、武将の実用品として名高く多くの人が所持していた偶然であろう。

また、村正は正宗の弟子との誤伝があるが、両者の間には百五十年のへだたりがある。なお村正は三代までである。

(3) 関の孫六

小説等によく書かれているが刀工銘は「兼元」。孫六とは、二代兼元のみを指す。作家、三島由起夫の切腹刀として近時喧伝されたが、これは後代兼元のこと。現在十七代目の刀匠が作刀している由。

前村正と共に有名で最上作者とされているが、現代の美術的価値からすれば、名刀ながらも、所詮三流品といわれている。

(4) 長曾弥虎徹と近藤勇

虎徹には、興里と興正の二代があり、近藤勇の愛刀として名高いが、またこれが偽銘であったとの事でも有名である。これは幕末の名工源清磨の作刀に刀剣商が、虎徹銘を入れたと伝えられている。清磨作であれば現在の評価では虎徹と甲乙はつけ難いが、作風は我々が一見しても分かる位、特徴があることからすれば近藤勇は刀に関しては鑑識眼がなかったかと思われる。

(5) 伊賀守金道と荒木又右衛門

鍵屋の辻の決闘で有名である。記録によれば二尺八寸の「金道」刀であり、戦闘中折れたとの事。寛永十一年の事件である。当時これだけの長寸であればおそらくこの日の為に備えて、二代金道への注文作であろう。

相手の河合甚右衛門の差料は「胴田貫」と記されているが、胴田貫とは肥後菊池に住む刀工群の居住地名であり豪壮な実用刀で、現代では美術的価値の低い田舎刀といわれている。

(6) 池波正太郎と刀

池波正太郎の時代小説「鬼平犯科帳」の主人公長谷川平蔵（実在の人物、寛政年間）も一連の「劍客商売」の秋山小平も共に差料は河内守国

助であり、時には井上真政であった。いずれも大阪新刀の名工であり、作者池波正太郎の好みかとも思われる。

しかし、時折長谷川平藏に伝家の宝刀粟田は国綱の名刀でチャンバラをやらしているのは、長谷川平藏が高級幕臣とはいえ如何にも勿体ない。有り得べからざる事に思える。

なお、河内守国助の直系十五世が、現在河内国平名名の刀匠で、現在の名工として活躍している。

余談として思いつくままに書いてみたが刀剣を中心に時代小説を讀んだり、古い巷間の事件や物語を顧みるのも面白い。

時代考証の充分でない作家は作中の人物に五十年も百年も後の銘刀を使わしている。また、源義経の奉納したと伝えられる刀銘が、室町時代の刀工銘等であれば伝説としてもナンセンスであろう。

むすび

刀剣は鉄で作られた最高の芸術品であるといわれている。闘争に使用するものながら刀そのものはもとより、刀装具（縁頭、日貫、鐙、鞘）にも、当時は相当な高価品であった、金銀細工の物を用いているのは戦場においての古武士達の美意識からのものだろう。

長い歴史において、切るという必要性から出発しながら現代ではこの要素は全く不必要となり、古い平安時代の物から現代の物までに求められるのは、その姿や地鉄、また、刃紋の美しさである。（美術的な）

一月末、前述の河内国平刀匠の談話でも、「現代刀工は、古作名工の鉄味、即ち鉄の表現する美しさの追求であり、正しくこれを求めれば必要性のなくなった切れるという要素も自然に備わる」との事であった。

思うままに書いてみると、簡単にと思っていたが大分冗長な原稿となった事をおわびします。この文中での年表、またその他の内容に、次の本より直引、また係引きや参考として多く引用した事をお断り致します。

記

- (1) 常石英明著 日本刀の鑑定と鑑賞
- (2) 藤代義雄著 日本刀工辞典（古刀篇・新刀篇）
- (3) 川口陟著・飯田一雄校訂 刀工総覧
- (4) 佐藤寒山著 日本名刀百選
- (5) 得能一男著 刀工大鑑
- (6) 藤根井和夫編集 歴史への招待
- (7) 戸川一男著 死闘記
- (8) 池波正太郎著 鬼平犯科帳・剣客商売 他

私の二刀を語る

剣道連盟副会長 勝 沼 信 彦

私が年をとってから二刀流を再開し、独特の工夫を加えた修業をするようになったのには以下の二つの理由があります。

その第一は精神的な理由からで、剣道修業の個人的価値観と現行剣道への反省に根ざしております。私は五十年近く剣道を続け、時には医学の勉強より優先させたほど好きでした。そして六十六歳になった今、現在言われている「立派な剣道」なるものの定義と、その定義の裏付けとなっている人生観ならびに剣道観に疑問を感じております。したがって今までやってきた剣道を離れて自由に意のままに剣を振るいたくなりました。

さて、二刀流は上品でないとか、正道ではないと思っている人は少なくとも、いことを知っています。この種の考え方は、二刀流に対してのみの問題でなく、人生において自分が永年やってきたものと異質であり、それが威力があるものに対して示す排他的因習性の一例に過ぎぬと思います。さて二刀を使うことが武士にとっていかに歴史的裏付けがあるかにつき説明いたします。剣は世界中どの国でも本来は片手で振るものでした。馬上では片手でしか剣は振れません。また、日本では武士は腰に二刀を差していました。したがって場合によっては両手で刀を振るようになることはありました。多くの剣の流派

に二刀の形が含まれている事実がその実証であります。したがってどこにも日本武道の発展歴史からみて二刀流が正道(?)でないと言える論拠はありません。ただ江戸時代以後、剣の思想的裏付けに禅と能の哲学が取込まれましたが、この事は一刀にも二刀にも同様に適用される筈であり、私は「劍禅一致」の思想は好きであります。更に二刀流が如何に勝負に強いかは剣道史が実証しています。二度の昭和展覧試合に二度とも二刀流の藤本薫と菅原照雄の両先生が決勝戦に残っています。「一刀使」対「二刀使」の比率を考えると二刀を使える人はかなり勝負に強いのだということが言えると思います。私は第八高等学校剣道部時代にライバルの第四高等学校の二刀使いに散々に痛め付けられ、二刀を知るためには自分が二刀を使ってみることであると思つたのが発端でありました。当時の四高には多くの二刀の名剣士がおりましたので、この人々から学びました。そして今では自分独特の二刀を工夫するのが私の「生きざま」に「番合っている」と考えています。

第二の理由は自分の高齢化に伴う技術革新の必要性からであります。長年剣道を続けた高段者は高齢化に伴い「後の先」「応じ技」は上手になります。これを剣道そのものが上手になったと思うのは錯覚と思つています。剣の本質は「足で踏込んで一振りて面を割る」ことにあると信じています。しかし、残念ながら高齢で最先に衰えるのが跳躍力と面を割るスピードと力強さであります。ここで意外にも高齢になっても攻撃力を発揮できるのが二刀であることに気が付きました。二刀は防御に強いと考えられてきましたが、私は二刀を攻撃の剣として再開いたしました。

それは、先ず防御に強い事を逆に使つて「ズケズケ」と問合いを詰めて攻撃に出られるという事です。二刀が攻撃力があるというのは、一刀が受け払っている間も、他の一刀は常に斬撃態勢にあることです。また、古流の二刀の形には同時に二刀共が切りに行く技さえあります。この場合どちらかを受け、または避けても他剣に切られる事になります。例えば面と突きを同時打ち、面と胴の同時打ちなどがあります。また、二刀流では高齢者でも強力な打ち込みが可能です。というのも一刀は上段にとっているために振りおろすだけです。スピードがでる。しかも、一刀流の上段と異なり「歩み足」で振り込みますから遠い問合いを一挙に飛び込めます。振りかぶっている一刀を「歩

み足」で「イチ」即ち一拍子で、高スピードで、遠い問合いから振り出せるところに高齢者でも出来る強力な攻撃力の理由があると考えています。更に「言つけ加えますと、二刀流での小刀での斬撃は全て有効にすべきでないという軽率な意見を持っている人がおりますが、それは現在皆が信奉している日本剣道形の「小太刀・本日の面の打ち」を否定することになります。前に出て、充分に体重がのり、スナップのきいた小太刀打ちは当然有効斬撃である筈です。

剣道という古い歴史を持った芸事にありがちな因習を越えて自由に自分の二刀を工夫することは、私のやってきた「学問の有りさま」と同じく、最も私らしい「剣の道の生きざま」と思っています。

随想「劍豪紀行」

人間・沖田総司の魅力

直心館館長 田村直

「何者だ、あれは。——」と、怒鳴る声がある。

小さな声で「沖田総司」と副長の土方が答えた。沖田総司は、天然理心流の免許皆伝者で技術は、近藤、土方よりも上で突き技の名人であった。年がわかく、しかもふしぎな若者で、どういふときでも明るい童子のような相模をしていたと伝えられている。

天然理心流は、いかなる相手に対しても動じない極位必勝の実践を教えていた。

荒海の水につれそう浮島の

沖の嵐にこころうごかす

◎自然にさからわず、天に象どり、地に法とり、以て剣理を究めることから「天然理心流」と命名し、近藤内藏之助長裕が寛政(七八九年)の頃に創

始された。(新選武術流租録)

強さというのは、総合的なもので、気力、精力、胆力。その上にやっばり体力が勝っているということが決定的だとおもうのである。沖田がその序列で二位にあるのはその体力にあるとおもう。

強さの順位(新選組剣上ベストテン)

近藤、芹沢、沖田、土方、伊東、斎藤、永倉、原田、山南、井上。(人気もこれと同じか)

わか者のねむれる墓や専稱寺

さつきの木々の緑ゆかしく

専稱寺(写真参照)は、東京の麻生に在り、沖田家の菩提寺である。先年、総司の法要が営まれたとき、御住職の読経が始まると同時に空が黒い雲に包まれ、風も加わり雷鳴大にとどろく激しい降雨になったことが話に伝わっている。(総司の魂が雨(天)くだったという)

◎司馬遼太郎の「新選組血風録」や、「沖田総司ふしぎな若者」にあるように欲を忘れて、この世に生まれてきたような若者と表現されているが、総司の心には、般若心経にある「色即空、空即色」の理が自然に身にそなわっていたのではないかと、との説もある。

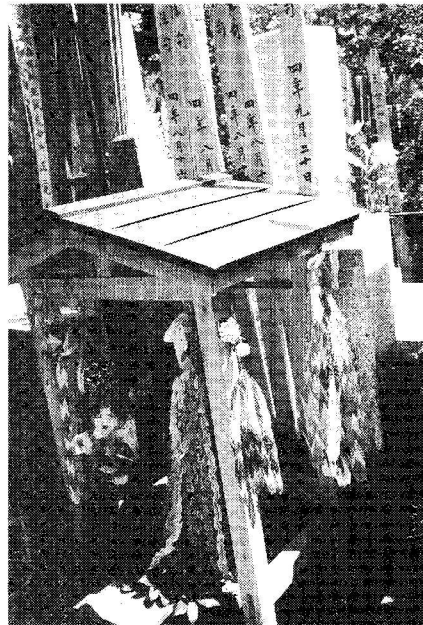
記録によれば、総司は九歳にして天然理心流試衛館道場に入門した。内弟子としてである。満八歳といえ、今の感覚でいうなら小学校の低学年。総司の少年期は多摩川に近い日野試衛館道場での日々、そのまま重なるわけである。(日野館写真参照)

新選組という殺伐な集団にありがちな暗さやニヒリズムの影のまといつくなかにあって、総司の存在は天性の明朗さをもっていて、彼のはにかんだような表情には、殺戮集団新選組の幹部にふさわしくないほどの心やさしい若者のナイーブさが語り伝えられ、多くの小説に書かれている。(激しさを内にかくしもっていたともいう。)

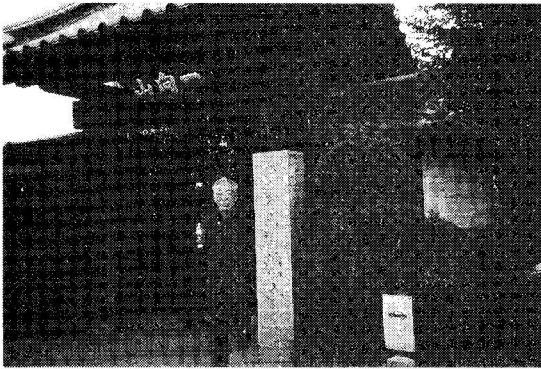
剣の強さに反して言葉はやわらかく魅力的であった。一いやだなあ」とか「おどろいたなあ」といったふうに、相手に応じてゆき、どんな相手の言葉

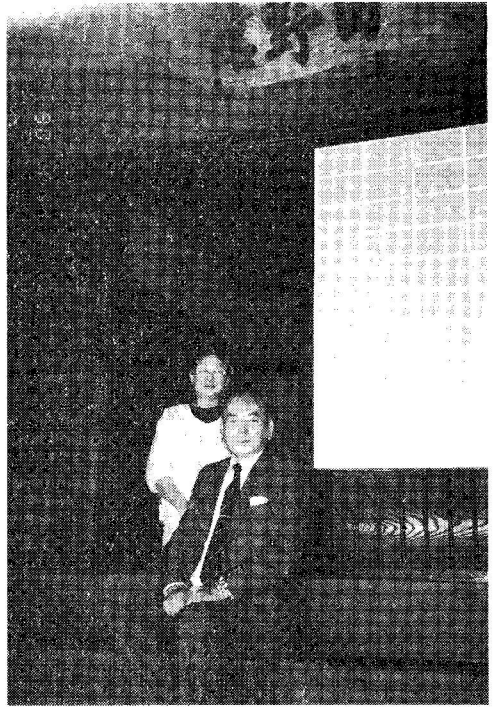
多くの若い女性ファンが訪れる総司の墓

(一九九二・一一・一一撮影)



本堂の裏に在り、千羽鶴で飾られ、ファンレターでいっぱい。沖田家の菩提寺(総司の戒名賢光院仁誓明道居士)
「本名 沖田宗治郎、浄土宗一向山専稱寺」の山門
東京都港区元麻生三 一三 七在。





東京多摩 試衛館道場跡日野館を訪ねて

好きな沖田さん。沖田さん蚊が多いですね、させないようにね。
また来ますから、私のお兄さん。

合掌

◎元治元（一八六四）年六月五日の夜は暑かった。
突如！「新選組だっ」

と、志士の一人が叫んだ。だんだら染めの新選組の袖印を認めたのである。池田屋に集まった二十人余りの志士たちの大刀は新選組の間者、山崎によって匿されてしまったので脇差を抜いた。

闘うより逃げろ、犬死するな」と。

首領の宮部が叫んだ。

近藤勇は、自慢の虎徹を縦横に揮う。

斬れッ、斬れッ」と近藤のどなる声。

この時点では志士たちの人数が圧倒的に多かったが、一方の四国屋に向かった上方隊二十数名が急ぎ加わった。やがて宮部鼎藏は力が尽き、観念して脇腹に刀先をつき立てて絶命。長州の吉田稔磨は、劍豪沖田総司に「たまりもなく討たれた」。

一世にいう池田屋事件である。」

何れにせよ、新撰組は、この事件を契機として傍若無人の行動をつづけ、血を求めて京市中をうろつき廻る狼の群れと化した。（新選組始末記）

池田屋事件の直後、総司は「旁咳」の為に咯血した。（総司の死は四年後の明治元（一八六八）年五月二十日）

◎私が劍豪「沖田総司」を知ったのは、戦前（一九三一年）少年雑誌「タンカイ」で総司が、トンボをねらって突き技を探究したという記事を読んでからである。

トンボが多摩川の堤に飛びたつ。

「はッ」

少年は小さな叫びをあげると、棒を構えて突進した。キラリと羽が光る。

トンボは、地に墜ちていた。

父母の顔を知らないで一〇歳の時、姉夫婦の家に養われ、後に沖田家を嗣いだのである。

でもやわらかくしてしまう。このような総司の心の天真で純朴で、あたたかい精神が、いまでもストリートに若者にうけつがれ語られており、今日もなお多くの総司ファンが墓前に集まり、線香や花束を捧げ、ファンレターのノートに恋々たるその慕情を、屈折する心のおもいを、切々恋々として書き記されている。

◎S・M記 六月二十日（新人物往来社）

沖田さん、今日は、……一度目の墓参です。

私がここに来た時大学生らしいお姉様がお二人、来ていらっしやいました。このファンノートに書いていかない人も多いいんですよ、ね。

私は、ここへ来ると沖田さんに逢えるような気がするの、お願いですから、私にお姿を見せてくださいな。今夜は夢枕に立って下さいね。

「お約束よ」「お願いッ！」

沖田さんは何十人もの人を斬りました。でも、だからといって沖田さんが純粹でなくあるいは俗にいう良い人間ではない、という事は絶対に言えないと思うんです。私は沖田さんの二十四歳という短かった命にもかかわらず多くの子供を愛し、自然を愛しきれいに自分を生きたそのお姿が好きです。大

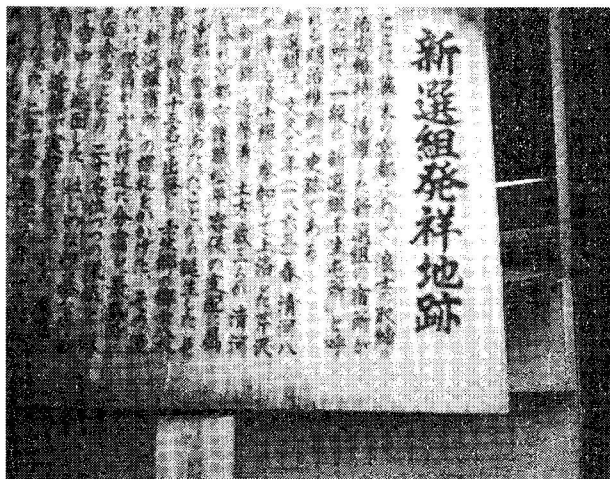
「はッ」

細い竹の棒を構えると、総司少年は、今日もトンボを狙っていた。夕焼けのなかに「赤トンボ」の体が火のように閃く。

総司少年は、このとき夕暮れ時のさびしい多摩川のほとりになつて、しんとした、音のない世界の奥の神秘を、知ったのではないか。

私は少年の頃、小松島市赤石町の豊浦神社の境内で、ほの暗い電灯の下で竹刀をにぎった。今は亡き「剣師」、笹倉太郎先生から「着物の胸がだらしなく開いていたり、帯の結び目が曲がっていたりすると必ず傍にきて直して頂いた」。稽古だけでなく日常の行為についても細かく躰けてもらったことを、沖田少年とあわせておもい出されてくるのである。

（沖田総司については、その筆跡（写真参照）からしても激情型の性格を奥に秘められていて、突き技は三段にて電光的であった、と。永井龍男）



京都壬生屯所跡（沖田等の匂いが残る）

沖田総司の書翰（小島資料館蔵）

沖田総司の書翰

（小島資料館蔵）

新春之御吉慶不可有際限
 御座候。愈御勇剛二被成御越年
 芽出度御義二奉存隨而私義
 無異加年仕候。右年頭
 御祝詞申上度呈愚札候。尚
 期永陽之時候。恐惶
 謹言

沖田総司
 房良（花押）

正月三日
 小島鹿之助様
 参入々々御中

秋意は生れ出ぬに似れ
 此坐落多氣守跡跡 礼象
 冬も出候内氣守跡跡 礼象
 春も出候内氣守跡跡 礼象
 夏も出候内氣守跡跡 礼象
 秋も出候内氣守跡跡 礼象
 冬も出候内氣守跡跡 礼象

期永陽之時候
 謹言

沖田総司
 房良（花押）

正月三日
 小島鹿之助様
 参入々々御中

人物紹介（各支部より）

〈徳島支部〉

堀家 賢二（五十歳 剣道四段）

徳島支部長 馬場 力



彼は香川県琴平町出身、高松丸善商事に勤務。昭和四十三年一月、二十七歳にして高松市揚武館の門を叩き、香西義一先生に剣道の手ほどきを受けた。その年の八月に初段受験を進められ思い切って受験、幸運にも一回で合格した。彼の素直さと努力が実を結んだと思います。だが彼の人生にも山あり谷あり、後、剣道も中途半端になり気持ちの上で焦りがあった。

平田なものではありませんでした。会社の営業上の都合で各地へ転々。その後、業務上数年は剣道は中断。昭和五十四年四月、東京都江戸川区なぎさニュータウン団地に住居を構えた。この団地に決めた理由は、この団地内に福田操・千葉光雄各七段の先生方が中心となり、なぎさ剣友会を結成、週数回に亘り家族ぐるみで剣道の基本、掛かり稽古、地稽古と楽しく前向きに活動している剣友会があったからです。早速入会。彼は良き先生に恵まれ数年間の心の焦りを一挙に解消するかの様に稽古に精を出した。その成果がでて、昭和五十五年十月に二段受証、昭和五十七年十月に三段を受証、彼持前の真面目さ熱心さが功を奏したのでしょうか。

やがて六年間の東京生活にも馴れた昭和六十年五月、丸善商事企画開発部長として徳島へ転勤。昭和六十三年秋城南町、錬心館に入門。週三回の稽古も殆ど休むことなく頑張り、平成三年二月一難関「剣道四段を見事に合格さ

れた。過日、堀江先生と幸いにもお話が出来る機会があり、彼が平成四年十月十八日徳島県社会人剣道大会に大将として出場、剣技のほどを幸運にも堀江先生に見ていただき、「馬場さん、堀家さんは七段の面打が出来ている。たいしたもんだよ」とお褒めのお言葉を頂き大変喜んでいきます。そのせいか近頃ますます腕を上げて、打ちに冴えが出てきた感じがします。寒稽古にも休まずに頑張りつづけています。これからは各剣道行事に参加し、多くの人々と交流を深め、よりよき剣道人となる事を期待致しております。

夏の暑さ 冬の寒さを何かといふ
我を上げます友とし思へば

〈真実一路〉鳴村 謙

徳島支部長 馬場 力



本籍 埼玉県岩槻市
現住所 徳島市山城西二一七・一・一〇六
勤務先 野村証券株式会社（平成二年）徳島支店勤務
段位 昭和五十二年 三段取得 東京都
昭和六十二年 四段取得 青森県
平成五年二月 五段取得 徳島県

彼は中学二年の秋、自宅近くの警察署の道場で剣道を始めることになった。幼い頃から、父の剣道をする姿を見て剣道に憧れていた。この時ばかりは本当にうれしかったそうです。（父は警視庁に勤務し剣道をしていたが、彼は柔道をやらせたかったらしい。）

その後、都立高校で剣道を続け地区大会で優勝し卒業と同時に三段を取得。卒業後、警視庁へ進みたいと父に相談したところ猛反対にあい、いろいろ考えたすえ法政大学へ進学した。大学で剣道をせず学外で剣道に打込むことにした。稽古は講談社の野間道場へ通い、各先生にお願いした。

昭和五十九年四月野村証券に入社、青森支店へ赴任した。青森県では山野

辺道場で稽古を続けた。(吾国での寒稽古は本当にきついものがあつたそうです。)昭和六十一年には父上が他界された。翌六十二年東京勤務になり再び三年間野間道場で稽古を続けた。平成二年十一月徳島支店勤務、岫雲館藤本辰夫館長に帥事することになった。当初、県外の人間がどれだけ受け入れられるか非常に不安な気持ちであつたようだが、快く受け入れて頂き稽古を続けている。徳島へ転勤し二年が経過、この二年間は一生懸命稽古に打込んだ日々であつた。彼の人生の大きな一ページになつたと思う。また、五段昇段審査にも合格した。何事を成すにも「自分一人では何も成し得ない」ことを痛感すると共に、基本の大切さを身にしみて感じた。このことを決して忘れぬよう肝に銘じている、と述懐している。また、会社員としての日常業務と稽古との両立の問題であるが、剣道を始めた頃から「一生修行だ」と稽古を続けようと胸に誓つた。これからもこの問題には体ごとぶつかり自分なりに解決していきたいと思つているそうです。

今後、一修行者として、一人の人間として、歩でも半歩でも前に進めるよう「真剣に」稽古に取り組み、日々精進していきたいと、彼は剣道に対し若き情熱を燃やしております。今後の成長を期待する次第であります。

「この道より 我を生かす道なし この道を歩く」 武者小路実篤

〈小松島支部〉

主婦剣道のホープ 有松 京子



小松島支部長 田村 直一

有松京子氏は、昭和二十六年三月七日(四十二歳)生まれで、昨年十二月六日、見事に「剣道五段」に合格なされた。十二年前子供と共に初めて竹刀を持ち小松島少剣クラブ(主任師範堀金実剣道教士七段、長池武一郎後援会長)に入会した。母子剣上の一期生で

あると西山明廣氏(後援会)は語る。

支部の全体会合では母子ともども私も練習に汗を流したが、初対面のときから「この女」……と迫りくるものを感じたが果たして御主人の深い理解の下に、家をあげて「常在剣道」の教えを實踐された。(有松伸也・長男、城ノ内高校剣道部、その外にも川添義仁、弘田誠、三木琢二等がある。)

「五段昇段のお祝いを申し上げたとき……の言葉。」

いま、思い起せば色んなことがあつた。技の面、精神面、挫けそうになつたことも少なくなかつたが、堀金先生を初め多くの先生方に励まされ親子で頑張ってきた。苦しいこともあつたが、体得したものが多かつたので人間として成長することができ、子供もまた期待にこたえてくれた。……と喜ぶ。

主婦達(川添悦子三段、三木弘子二段、阪本杏代子三段、長谷川陽子二段、中尾青子三段その他)の多くの方々も有松氏について女子部に参加されて切磋琢磨して努め勉めた。みんな「小松島支部女子部のホープ」であられる。

有松さんは、合格の喜びをもってその限りとせず「継続精進は力なり」のこの言葉を座右の銘として、これからは、子供と一緒に競い合い励まし合いながら爽やかな汗をばいかけたい、そんな気持ちで「ばいですと、爽やかにきっぱりと、話してくれた。……私はその言葉に共感しそして感動した。学び得た剣道を子供達へ……一人でも多くの豆剣上の誕生を……と願つての心。

「二灯照隅業」

有松五段の剣歴

初段 S 五九・三・五
 二段 ♪ 六〇・三・三
 三段 ♪ 六一・五・八
 四段 H 元・二・一九
 五段 ♪ 四・一・六

〈丹生谷支部〉

野々宮真佐夫 (三十九歳 五段)

丹生谷支部 岩川 正毅

氏は、阿波の景勝驚敷ラインで知られる那賀郡驚敷町仁宇に生まれる。阿井小学校六年生の時、故原貞一先生の手解きで振武館道場で剣道を始めた。驚敷中学校時代は吉田祖先生の指導を受け、頼もしい先輩、同級生に恵まれ伸び伸びと練習に励んだ。

阿南工業高等学校へ進んでからは、清原栄先生と出会い敬しい練習に耐え、三年生時には念願のインタハイ(徳島県開催)に初出場を飾る。卒業後は家業を継ぐと同時に驚敷町体協剣道部に入部し、数々の試合に参加するや多くの輝かしい優勝も経験された。選手としての活躍もさることながら、昭和五十一年四月十八日第一回山家旗争奪県下剣道大会及び前夜合宿が驚敷町で開催され、十名足らずの部員で徳島市、日和佐町までの布団運びから会場設営を続けて、本年第十八回を迎える。その間、真面目、筋で支えて来た努力家でもある。現在は、その人柄を慕い若い剣道仲間が次々と入部し、驚敷町体協剣道部長とし、また現役選手として各種大会に出場のかたわら、驚敷スポーツ少年団の指導に当たり、そのあと一般練習をこなすという活躍ぶりであり、また、各種大会には「振武館」チームとして出場するまでに至った。また、数多い知人を尋ね、他道場や市町村剣道仲間との交流にも力を入れ、教材用ビデオ活用の剣道研究、練習方法、レクリエーションなどアイデアと閃きにも目をみはるものがある。

これからも益々技を磨き、剣道発展を目指し健やかで、すばらしい剣道人生を歩んでほしいと願うものである。

〈阿南支部〉

池田 洋一 (三十歳 三段)

阿南支部 西岡 侃

昭和四十六年大野小学校剣道部創立と同時に入部、練習熱心で五年生の時、剣道大会で見事に初優勝し、阿南第一中学校を経て昭和五十三年四月に県立阿南工業高校機械科に入学、そこで彼の剣道は本格的に磨かれた。現在剣道部主清原栄先生、剣道錬士鎌田恵先生の指導で阿南工業高校剣道部が実にすばらしい成績を築かれていた時代であった。剣道の基本からみっちり指導を受ける。技巧剣士清原栄先生の熱意あふれる指導、一に稽古二にも稽古、学校から自宅に帰るとバツタリ倒れる程。そのきびしい練習の中で攻めを覚え、打つべき好機を覚え、応じ技も覚えるのであると私は思う。練習がきびしいので剣道部を去って行く部員もあつたが彼は努力を重ねた。

鎌田恵先生の礼節を尊ぶ指導はまず「正座」と「返事」の正修から始める。立派な「正座」が出来、何を言われても「ハイ」と囁み切るような明確な返事が出来、先輩達の防具の整理整頓、稽古着ハカマの手入れ(アイロン掛け)等、実に剣を学ぶ者として人間形成の大切な事を親身になって指導してくれる。清原先生の技巧的な指導と鎌田恵先生の礼節を尊ぶ指導が一致して阿南工業高校剣道部の黄金時代が築かれたと言っても過言でないと信じます。その剣道部で池田君は修行を重ね全国大会にも出場、三段も修得して卒業後、徳島マツダ自動車KKに入社しエンジニアとして活躍していたが数年後に父が営む農業、土建業を継ぎ現在は主役として活躍、彼の真面目さと几帳面さ等で近付の評判も良く、これからの時代を背負って立つ好青年である。剣道は高校卒業後は忙しくて休んでいたが、昨年(平成四年)より大野小学校剣道部の指導を手伝ってくれるようになり、後輩の西岡直彦三段と共に生徒達より若先生として好かれている。根性のある立派な少年剣士の育成と自分の剣道を磨き、必ずや四段の昇段にも挑戦してくれる事を信じてやまない。

|| 剣道随想 ||

北島北小六年 高田園子

〈板野東支部〉

面を打たれた

北島北小六年 吉田直正

五年前、剣道部員募集という手紙があった。一年の時、年上の子がやっているのを見て「すごい」というイメージを持ち、それ以来剣道にあこがれていた。しかし、いざ剣道をやってみると楽しいのは最初だけで、後になるとやめたい気持ちでいっぱいになった。どんなに試合に負けてもその負けた時のくやしさをバネにして練習をかきねた。そしていろんなけいけんをつみかさねた。いろんな人としりあいにあり、今ではたくさんの方がある。

自分でもよく五年間もがんばったものだなあと、感心するほどだ。この間にも剣道をやる人もいればはじめる人もいた。試合で負けても、この詩をバネにしてがんばった。

面を打たれた

面を打たれた

もう少し手をのばせば

ちょっとでものばせば

とどいただろうに

頭が目覚まし時計のように
足がギターのげんのように
いつまでもいつまでも
ふるえてた

私は六年生の二学期ぐらから北島少年剣道教室に入りました。友達にさわられた時、そんなに「やりたい」という気持ちは無かったけれど、いちおう見学をすることにしました。見学した時に、「かっこいいなあ。一回やってみたいなあ。」と思うようになりました。

初めのころ幼稚園といっしょに基本練習をしていました。人だけ六年生だったので、すぐくはずかしい気持ちでいっぱいでした。高学年のけいこをするところへ行ったら、もううれしくてうれしくてすぐうかされてしまいました。けれど思っていたよりもすぐ練習がきつくてビックリしてしまいました。

みんなは、二年生や三年生などまだ小さかった時から剣道を始めていて、私とは比べ物にならないほど、強くて、私ももっと早くこの北島少年剣道教室に入っていればよかったと、すぐこうかいています。もっと早く入っていたら、もっともっと強い選手になっていたのかもかもしれません。

これからはがんばっていきたいと思います。この小学校最後に、とってもいい思い出となるような事となるようにがんばります。

〈名西支部〉

松田みつ子

(四十二歳 五段)

神山町神領に昭和二十五年に生まれ、中学時代帰宅中に徳島県立農業高等学校神山分校剣道部の練習を見学。入学後、恩師高下正義先生に学び、高二の時、全国大会(広島)、四国大会(高知)に出場。思い出多い学生時代を過ごさせていただきました。卒業後愛知県岡崎市の道場に通い、次男が小学入学と同時に家庭婦人として練習を始めました。現在石井中学三年生が私の

初めての教え子になり優秀選手にも選ばれました。また、居合にも興味を持つ年齢になり練習しています。三十四歳の時、第一回全国家庭婦人大会が日本武道館で開かれ団体戦先鋒として出場。一生の素晴らしい思い出のページとなりました。現在優勝は一度もなく私の目標の一つです。十分練習のできた高校時代を懐かしく思い出します。週二回の現在を大切にしていきたいと思えます。

徳島の剣士様、今後ともよろしく御指導下さいませ様お願い申し上げます。

六 條 博

(四十一歳 二段)

私が剣道に魅せられたのは子供が徳島石武館で重井館長の下で剣道のご指導をいただいているからです。私は元米汗を流すのが好きな性分で、あらゆるスポーツに手を出して来ました。中学・高校時代にはサッカーに夢中になり、集団生活、チームワークの重要な事も学びました。刑務官拝命後は柔・剣道いずれかの選択を余儀なくされ柔道を選びました。剣道はくさい、道具の着装が面倒くさい、何となく陰気くさい、などと感じていました。ところが子供には家内よりも積極的に剣道することを勧めた様に思います。何故でしょう？

三人の子供が次々と石武館に通い熱心に稽古に励んでいるのを見ているうちに、他のスポーツには無い善い物があるのに気付きました。

力量、技術、段位、老若、男女の区別なく誰とでもしかもマンツーマンで、一対一で互いに汗を流して人間形成が出来る。なおまた、相手がなくても一人で、一人稽古が出来る。勝敗にこだわることなく常に自己と対決して向上を求める。こんな剣道に魅せられて遅蒔きながら剣道をはじめました。子供達と共通の話題を持って親子共々息の長い奥の深い剣道を「継統は方なり」の言葉を信じて求道の道を進みたいと語っています。現在、徳島刑務所会計課勤務。

美馬西部支部

美馬町剣道教室 仲 稔

(四十歳 初段)

現在、花形スポーツと言えはサッカー、野球です。剣道のイメージは暗い、時代遅れと言われがちです。でも、老若男女が抵抗なく受け入れられるスポーツは剣道ではないでしょうか。剣道教室にお世話になっている息子の送迎をしているうちに指導員の先生方から「ひとつ剣道をやってみてはどうですか」と誘われました。

最初は年齢も年齢だし今さらやっても……という思いが強くなった末、妻と息子に相談してみたところ「やってみれば」と言でした。

私は剣道を始めただけには中途半端は絶対にしたくないと心に誓いました。竹刀を持ち、初めは小学生と基本からの稽古、私にはこの週二回の練習がとても苦しく、息が上がりが、歯を食いしばって必死に稽古を重ねてきました。

先生方の熱意ある指導と、小・中学生のあたたかい受け入れ、そして、ほぼ一年足らずで初段に合格した時には、なんとも言えない感慨をおぼえました。

私は剣道を始めて、今では本当に良かったと思っています。指導員の先生方には心から感謝しております。これから先、幾度もスランプと戦わなければならぬと思いますが、剣道の練習を通じて学び、一生懸命これからも練習に励み、私の目標に向かって頑張っていきます。

三好支部

来代 修

(四十六歳 二段 福祉施設職員)

私が剣道と出会ったのは三十九歳の春でした。動機ははなはだ不純で申し訳ないのですが、一人っ子でわがままな長男に困っていたところ友人から剣

道をさせたらと勧められ小学二年生の時、お父さんも一緒にするのならしてもいい……」ということで親子で国金唯義先生の著蔵剣道教室へ入門させていただきました。竹刀を握ったのは生まれてはじめてでした。

以来七年、現在息子は中学二年になり野球部に所属していますが、小学校卒業時二級をいただき、私は二段（平成二年十二月九日）授与されました。

剣道との出会いは、私の人生観に何か大きなものが一つ増えたような気がします。知人、友人が増えたのは当然ですが職業柄ストレスや肩コリが激しい為、週二回の練習はその解消に、心身共にスカッとしますし精神衛生上、健康維持にと大変役立ち喜んでいきます。

常日頃、萩田幸弘先生のご指導を受け乍ら感じることは、今までたくさん種類のスポーツと接して来ましたが、剣道は一生続けられる生涯スポーツの一つと考えます。良きスポーツに出会い、良き師に恵まれたことを感謝しながら三段を目指します。

〈阿南支部〉

家族と剣道

橋本俊行

(四十歳 三段)

竹刀のツルの結び方がわからず、新しい竹刀を買いにいきました。買ってきた竹刀をバラして結び方を覚えめました。

長男慎一郎が羽ノ浦少年剣道教室にお世話になり始めた頃でございました。小学校二年からお世話になり、はやいものでこの四月から中学校へ入学いたします。

以来、六年の間家族一同、剣道と共に生活をしてまいりました。竹刀が昔よりも高く防具の重さで、歩くのがやっとの小さい子供が、暑い日寒い日、雨の日風の日も週二回の練習を欠かさず続けてまいりました。試合の日には家族で応援にもまいりました。朝食がのどをとらない日もありました。負

けが続いているときなど見るのがかわいそうでなりません。自分なりに考え、勝とう、と努力している姿勢が、明日へ望みをつないでくれております。勝負試合が少ないのが、番つらいようです。こうした、くやしき、苦しきなかで言葉では言いあらわせない、何か大きな大切なものが芽生えてきた様に思います。一生懸命練習している姿は何もかも忘れてしまふほど楽しそうで、生き生きしております。

剣道の楽しさを、子供が教えてくれました。この楽しさに引かれて私も剣道を始めました。早いもので四年が過ぎようとしています。尾崎先生、濱田先生をはじめ多くの先生方にご指導いただいております。竹刀を握りますと、手の平から、腕をとって肩から背中、背中から御腹、御腹から両足へ、異質な温かい物が体の中を駆け巡ります。技が決まった瞬間などには、遠い遠い昔、母の歌を聞きながら眠かかっていた子供の頃の、あの子守歌のような心地よい感触がこの手の平の中に湧き上がってまいります。激しい練習の後の気怠さはなんともいえない剣道の魅力の一つでございます。マグマが地球の地下深くで燃え盛るがごとく剣道に対する情熱が、今燃え始めようとしています。

せめて三十歳頃から始めていけばなんとかなるのではないかと考える事がございます。しかし、考えてみますとその頃は子供ができたばかりで、仕事、仕事で生活にゆとりすら無い時代で御座いました。そんなことを思いますと、今こうして剣道が自分なりにできることは、大変ありがたいと思っております。曲がりなりにも子供二人それぞれに頑張ってくれ、妻も私もこうして健康でいられます。家族四人希望のある楽しい家庭をこれからも守り続けていくつもりです。慎一郎も中学校ではもうひとまわり大きな剣道をしてくれるものと期待しています。

これからも家族と共に「剣道」を続けてまいりたいと思っております。

〈板野西支部〉

板野西支部 副支部長 岡田良人

少年時代から苦勞を重ねた人生だったと聞いた力士曙が、外国人としては相撲界初めての横綱になった。曙にとつての日本は言葉さえわからない外国であったに違いない。あらゆる艱難を克服し、厳しい相撲道のしきたりを叩き込まれ、師や先輩を敬う日本独特の国技の美しい精神を愛し、それを守り、人の何倍もの稽古を重ねた結果、勝ち取った最高の榮譽である。その曙に対し心からおめでとうと言いたい。

相撲の世界に対しては興味もなく、番付にしても小結と関脇と大関と横綱ぐらいいか知らなかった私であるし、ましてや、どの力士がどの番付で勝負しているのか、今日の取組がどうであったのか、日本人としては恥ずかしい話であるが全く興味を示さなかった。

ところが、この頃NHKの朝の連続テレビドラマ、『ひらり』を見るようになって相撲の世界が好きになった。何故かという朝稽古のすばらしさに感動したからである。剣道の世界もずいぶん稽古をすむと思っていたが、相撲とは稽古の量が違うのではないだろうか？ ドラマを鷓呑みにする訳でもないけれど、毎朝四季を通じて汗と上にもみれ苦闘している姿は神々しくさえある。ましてやドラマではなく、曙が明治神宮で土俵入りした時は太刀持ちその他お供の日本の力士も裸になり、牡丹雪の舞う石畳の上で曙の土俵入りに花を添えたことには、世界中が感動したに違いない。曙も立派であるが自分たちを越えてチャンピオンになった曙に対して、人種の隔たりなく尊敬の念を持って奉仕しあくまでも先輩として立てる日本人力士と、日本独特の国技の精神を厳守する相撲の世界に心から頭の下がる次第である。

国技は相撲ばかりではない。剣道も日本独特の立派な国技である。多くの剣士たちが何代にも亘って心を練り技を磨いてきた。その国技を国技などとは言わず、命を賭けて勝負の世界に身を没し、修行の足りない者、技の稚拙な者は勝者の剣技を磨くため大きな犠牲の砥石として命を落として来た時代を日本の歴史が証明している。それは剣道だけでなく居合道も同じである。

そうした先人たちが命を賭して会得し、工夫を重ね培って来た道を後から歩き、編み出した技を容易に学べることが出来る現代の私たちは本当に幸せである。幸せではあるがその幸せに甘えず、私たちは更によりすばらしい剣道、居合道の技や心を修行し研鑽して後世に伝える義務がある。それをしないで怠る者は先人たちの切り拓いてくれた茨の道を景色を眺めながら通るのと同じである。

現在、柔道も含めて日本の国技が世界的になりつつある。オリンピックにおいては柔道で何度か外国選手に敗れた。そして今日、外国人の曙が日本の力士に抜きん出て横綱になった。こんなことから想像すると日本の剣士はうかうかしてはいられない。全日本選手権試合において、背も高く歩幅の広い外国選手が優勝する時代が来るかもしれない。剣の世界が心と実力の世界である以上、この両方が伴えば誰が日本一になっても、また、世界一になってもおかしくはないのであるが、人種差別ではなく妬みや嫉みでもないが、日本の武道は日本の国技である以上、日本人の心情として、やはり日本の選手に『一位』の座は常に確保してもらいたいと思うのは我田引水だろうか。

心、心と私は書いて来たが、日本の剣士たちが技と共に培って来た武士道という精神、こんな言葉を使うと古いと笑われるかもしれないが、技の鍛錬と同時にその精神も練磨され、伝統として受け継いで来たからこそ、剣道も相撲も国技である。先輩や師に仕える心、奉仕の心、自然や人を愛するやさしい心、一所懸命に学ぶ心、工夫する向上心、不精に恃まず何でも進んでやる心、稽古に熱中する心、物を大切にする心、こうした武士道精神を、後世に伝えられるよう磨けたらと思う、今日この頃の私である。

〈三好支部〉

私の剣道歴



三好支部 剣道四段 橋本清匡

私は大正四年一月生まれ、今年七十八歳の誕生日を迎えました。

私が竹刀を握ったのは昭和三年旧制徳島県立池田中学校に入校してからでした。

中学校では剣道か柔道の何れかの部に入ることになっており、私は剣道部に入ることになりました。

一学期は毎日が基本練習で、二年生以上は防具をつけての練習、道場内を竹刀の音と気合のかかった掛け声で汗を流しておりました。

私達は、二学期に入り防具をつけて先輩の指導のもと稽古をつけていたとき時間いっぱい練習に励みました。

三年生になった時、東京高等師範学校卒業の阿部鎮先生が着任され、その指導も厳しく、一段と熱が入り部員一同益々上達し、県下中学校大会にも出場し好成績をあげることが出来ました。

中学五年間の生活も終え卒業することになり、卒業式では剣道一級の証書を得ることが出来ました。同級生の現三好支部の松浦信英さんは最高の初段で卒業しました。

卒業後は青年団の一員として町内演武場に通い練習に励み郡内、県下の大会に出場して多くの方々と竹刀を交えることが出来ました。

その後、徴兵検査で見事甲種合格となり現役兵として徳島歩兵第四十三連隊に入営しました。軍隊は銃剣術で初年兵には厳しい訓練でありましたが、私は剣道の練習が役立ち銃剣術の朝・夕の稽古にも十分耐えることが出来ました。

三月二十四日の連隊の軍旗祭には銃剣術のほか、軍刀術（剣道）の各中隊

対抗試合があり私は剣道の心得があるとのことで中隊の名譽をかけ選手となく久し振りに竹刀を握り好成績をあげました。

除隊後は専売局に奉職し、夜間は町内演武場に通い練習に励みました。

昭和十二年七月支那事変起こるや充員召集により徳島連隊に応召、当時陸軍歩兵伍長、中支戦線に出征、中支各地に転戦しました。

昭和十六年十二月大東亜戦争起こるやビルマ戦線に参加、ビルマ各地に転戦しました。

二十年八月終戦となるや英軍の指揮下にて労役に服しました。労役中英軍の将兵達が、日本の武道が見たいと連絡あり日本の武道、角力、柔道、剣道を見せることになりました。角力、柔道は直ぐに出来るが剣道は防具、木刀、竹刀がない故、止むなく武装解除の折取めた将校達の伝家の宝刀を借りることとし、日本剣道形を披露することにした。

真剣での形なので練習を充分にした。下士官の部では一日から三本までで私と藤松雄さんが、将校の部では四本日から七本までを現県剣道連盟の勝浦守先生と今井力男さんが演武しました。真剣のためお互いが呼吸と気合を合わせて演技を無事終了することが出来ました。

内地復員後も剣道に励み、青少年の指導と支部員との練習を重ね県下社会人剣道大会には三好支部のため、第六回大会から数回出場し先生方と交流することが出来ました。

以上が私の剣道の歩みです。

〈阿南支部〉

剣道で学んだもの

大野小学校剣道部六年 一級 尾崎文博

僕は、小学校三年生より剣道部に入部しました。四月から中学校です。僕は剣道を今まで練習して来る中で多くのことを学ぶことができました。

その一つは、剣道は人に勝つことではなく、自分に勝つことであるという

ことです。寒い冬の練習、そして暑い夏の日の練習、とてもつらく苦しいことでしたが、そのような練習を続けていくことでなまけたいとか、やめてしまいたいという自分に勝つことを覚えたように思います。

また、多くの試合を通じ見知らぬ沢山の人を知ることができました。私達は社会の中で、決して一人で生きていくことはできません。強い人もいれば、弱い人もいます。気の合う人もいれば、合わない人もいます。多くの人との交わりを通じて、どうすれば他の人と和を持って接していけるかを学んだように思います。それは相手の人の心をよみ、相手の人の気持ちが変わらなければならぬと思います。

僕は四月から中学生となります。中学生になっても剣道の教えである強い心、そして優しい心、また他の人達への思いやりの心を育てていきたいと思っています。今後ともよろしくご指導下さいますようお願いいたします。

剣道短歌『直心館』

直水作

少年よ強く正しく育てと祈るこの心直心館創立十七年を迎う
さわやかに鯉のぼり立つ直心館少年の日の耀きており
たのしみは寒中稽古で子供等とうましようましとせんざい食うとき
よろこびは夕べ夕べに少年たちと竹刀手に持ち剣学ぶとき
立ち向うときの心を君問えばただひるまずに打てと答えん
天地一ぱいに満つところ眼には見えねどその心剣の稽古の源とせん
剣友の遠方より来る声も高らかにみんな琢磨して剣心競う
朝稽古しじまひきさき少年剣士窓辺に月かけ斜に入る
身ところ技をきたえてよき人となれと教えつつ我はいかにと
気海丹田の底もなくふちもなけれどその大元を今日も鍛えと師の教え
独り坐す剣の道場月冴えて無想の丹心いまだ決まらず
目を閉じて色即是空念ずれどあわあわと崩れゆく虚のころ
前山の楠樹ひとときわ映えれどもわが剣冴えず孤影ふむ



1993. 2. 11 直心館一同

徳島の剣道

各パートからの報告

48 国体への強化（成年男子）

成年強化部 近藤 亘

国体に向けて頑張ろう

事務局長 藤 本 辰 夫

長い間、その二字に圧倒されそうだった国体もいよいよ本番を迎えることとなり、これまで貯えてきたものすべてが放出され、その真価を試されるとあって感無量のものがあります。

事務局としてここまでやって来れましたのも、会長はじめ役員の先生方並びに会員の方々の御指導と御協力のおかげであり、厚く御礼申し上げます。

さて、その国体ですが、選手強化は日増しに練習量も多くなり、一方役員及び補助員の訓練もこれから本腰を入れて本番さながらの予行演習を重ねていかなければなりません。

したがって、皆様の貴重な時間とエネルギーを惜しみなく奉仕して頂くのは、むしろこれからだと思っております。

行政当局と競技団体が成功に向かって一つになってこそ美しいハーモニーが奏でられるものと思っておりますが、競技団体としては会員個々の奉仕の精神が集まって原動力となっています。

国体開催で得ることのできる成果は、それに協力した人達の心の満足であると思うのです。これらすべての人々が満足して頂けるよう事務局としても全力投球で臨みたいと思っておりますのでこれまでも増して御協力の程よろしくお願い申し上げます。

東四国国体の前年にあたる平成四年の国体強化は本番を目指しての実力アップと、山形国体での上位入賞を目標に強化選手を28名から19名に絞り込んで取り組みました。

○県外遠征

3月20日の和歌山県遠征に始まり、4月4日～5日（高知県）、8月24日～28日（警視庁）、9月12日～13日（愛知県）、9月24日～27日（大阪府・三重県・滋賀県）、11月7日～8日（香川県）と計6回8都府県で実施しました。特に警視庁では気合のこもった試合並びに稽古を行うことができました。

○アドバイザーコーチを招いての講習会

範十八段佐藤博信先生に3月28日～29日、6月20日～21日、8月24日～28日（警視庁）、10月24日～25日の4回来県、又は遠征に同行いただき適切なアドバイスとご指導を受けました。

○県内合宿

チームワークの醸成を目的として4月25日～26日（鷺敷）、5月16日～17日、6月20日～21日、7月4日～5日（鳴門）で4回合宿を行いました。

○県外チーム等の来県

7月14日～15日（大分県警）、7月23日～24日しらさぎ剣友会（兵庫県）、7月31日～8月2日（京都国体選手）、8月29日～30日（山形国体選手）、9月6日（福岡国体選手）、10月20日～21日（岡山県警）のチームが来県し試合、稽古を行いました。

○毎週土曜日の強化練習

毎週土曜日午後3時から警察学校体育館において基本をメインとした稽古を行いました。

以上強化を実施したわけですが、

7月19日香川県で行われた国体四国ブロック予選で成年2部（三位）、10

月5日と8日の山形国体で成年1部は一回戦で宮城県と対戦し4敗1分けと完敗しました。

敗因を検討してみますと、いろいろありますが、一言で言いますと「勝負に賭ける執念」が足りない（私自身も含め）ように思いました。

選手ひとりひとりが「優勝」という文字を心に刻み込み弱い自己に打ち勝って敵しい稽古に励み、充実した日々を送ることが大切だと思います。

平成5年もスタートし、いよいよ本番です。「優勝」を合言葉に悔いの残らない強化を行ってゆきたいと思っています。

女子部

徳島市立高校教諭 手塚 十二子

今年度の女子部の活躍も枚挙に遑がありません。まず那賀川中学は全国中学選抜大会において、昨年の準優勝から今年は遂に頂点を極め、さらに十二月に行われた全国最強チームが集う若鷲大会でも優勝するなど、その実力を全国に披露してくれました。

高校の部では富岡東高校が四国大会五連覇の夢は昨年消えはしたものの、今年度は再び優勝、全国総合体育大会でも堂々の健闘をしています。

一般の部においては、八月国体リハーサル大会として本県で開催された全国教職員大会で県下の期待を一身に受けて出場した古川久美子選手（富田中教）が、初戦から気迫に満ちた安定した試合運びで小松島市立体育館の観衆を心地よい緊張と大歓声の渦に巻き込み見事優勝しました。数々の優勝は国体への大きなはずみといえます。

全日本女子選手権大会では、吉岡久美子選手（富岡西高・立命館大・徳島代表）と路選手（富岡西高・立命館大・京都府代表）が姉妹で出場、その健闘ぶりは大きな話題となりました。

県下女子選手権も今年度からは一般の部を対象として行い、講習会をも含めたものにより充実を図りました。剣道は男性も女性もなく一つであるとよく言われますが、男性の強さ、逞しさを学びつつ女性の持ち味を生かした、

しなやかで美しく上品な剣道を目指して女子剣士の皆さん共に頑張りましょう。

高校の部

坂本 信幸

今年度は、強化指定校の躍進が目立った。県総体団体は男子が城ノ内、小松島の競り合いとなり大接戦の末、城ノ内が初優勝を飾った。女子は昨年度の雪辱に燃える富岡東が順当勝ちし2年ぶり8回日の優勝を勝ち取った。個人戦は男子が逆転で磯部（富岡東）、原岡（富岡西）の順となった。女子は小笠、山崎の富岡東勢が上位を占めた。

四国大会では昨年度女子団体5年連続の優勝を阻まれた富岡東が堂々の優勝を飾った。また2年連続の男子個人優勝を狙った磯部（富岡東）が決勝まで進んだが惜しくも第2位となる。磯部君は男子練習相手の少ない状態での健闘、本人はもとより監督の河田先生のご指導に対して感謝称賛する次第であります。

全国総体は暑い中、宮崎県高千穂町で行われた。上位進出を期待したが、女子団体の富岡東が予選リーグを勝ち抜き健闘したが、決勝トーナメント1回戦で敗退した。

また、第1回の全国選抜剣道大会は、愛知県春日井市で行われた。男女共川島が出場したが予選リーグで敗退した。

さて、平成5年は東四国国体の年であります。高校生の現状はまだまだ上位入賞を狙えるところでなく、今後諸先生方のご指導ご鞭撻によりまして強化できたらと思っております。益々のご協力をお願い致します。

中学校の部

鷺敷中学校教諭 富田 正

本年度まず特筆すべきことは、全国中学校選抜剣道大会女子の部において那賀川中学校が優勝したことであり、昨年度の準優勝に続いての快挙であり、このことは、私たちはもちろんのこと県中学生にも大きな自信と希望を与えてくれたように思います。監督の斎浩市先生をはじめ選手及び保護者の皆様に心からお喜びと感謝申し上げます。

さて、六月の県中学校剣道選手権大会を振り返ってみますと、男子六十校、女子二十九校の参加があり、まず男子は市場中と相生中の決勝戦となり本数差で市場中が制し、女子は昨年度より負け知らずの那賀川中が安定した力で決勝へ進み市場中を三対一で退けました。

次に、七月の県中総体ですが、まず団体戦では男子は市場中と阿波中の阿波郡勢の対戦となり、これも先の県中剣道選手権と同様にやや地力に勝る市場中が本数差で阿波中を破り、7年ぶりに全国大会の切符を手にし、女子の決勝は、戦前の予想どおり那賀川中が危なげなく勝ち進み、2年連続の優勝となりました。個人戦は佐藤（市場中）、藤崎（相生中）、女子は坪井（那賀川中）、陶木（那賀川中）の順となり、特に女子個人戦ベスト4には那賀川中勢が占めその強さを不動のものとなりました。

次に、四国中総体ですが、本県代表校が素晴らしい活躍をみせました。男子においては市場中が山田中（香川県）に負けたものの準優勝、阿波中がベスト4、女子は那賀川中が2連覇、また男子個人戦においては、原（相生中）が第二位、女子個人戦においては、坪井（那賀川中）が第一位、藤原（阿波中）が第二位、敷田（那賀川中）が第三位に入賞しました。

八月に福井県で開催されました全国中学校選抜剣道大会では前にも述べたように那賀川中が並み居る強豪を次々と破り、念願の全国制覇、男子においても市場中勢が善戦、また、男子個人戦で佐藤（市場中）がベスト8に入るなど四国大会に続いての好成績でした。

本年度、各種大会で好成績を残せたことは、中学校部にとって本当に充実

した年度であったように思います。この活躍の陰には熱心な指導者、生徒、保護者さらには地域との連携、その連携のうえに近年多くなってきた県外への遠征、近隣県との交流会等の実施がレベル向上につながっていることを忘れてはならないと思います。

中学校剣道部として、課題はまだ多く残されておりませんが、この成績に驕ることなく、この流れがいつまでも続けられるよう更に頑張ってもらい、頑張っていくつもりです。日々の先生方のご苦勞やご指導に感謝しながら中学校部の報告と致します。

居合道部

高橋 憲 司

平成四年度の県剣連主催の行事は、県立中央武道館において四月五日に澤田範士を迎えて春季講習会を、十一月七日と八日に福田範士を迎えて秋季講習会を開講しそれぞれ二十七名の受講者がありました。九月六日と七日の居合道中央講習会には高橋・青木両受講者が派遣せられ、それを受けて九月十七日に伝達講習会を開講しましたがその際の受講者は十八名でありました。大会は十月十八日に東京において第二十七回全日本居合道大会が開催され、本県から五段に坂本選手、六段に吉岡選手、七段に高橋が参加し五段、六段は共に緒戦を突破して善戦したのですが七段は一回戦で敗退しました。審査会は五月三十日と十一月八日に級々五段の審査を実施し、それぞれ十九名、三十二名の昇級・昇段者がありました。

中央審査会においては、松村宏道氏が十一月十四日東京において六段に合格されています。

部の行事として、四月二十六日中央武道館において香川大会及び全日本大会の代表選手の選考をかね四十一名の参加者があって県下居合道大会を開催しました。七月十二日の香川大会において六段で吉岡選手が第二位の成績であり、初・二・五段で共に一回戦へ進出しましたが、三・四段が初戦で敗退して段位において力のバラつきがみられました。今年度、強化練習会は六月

七日に石井勤労者体育センター、八月二十三日に木頭中武道場、九月二十七日に石井勤労者体育センターにおいての三回しか実施ができず来年度の反省材料となりました。

なお、秋季講習会に講師としてお迎えしている福田範上にはその功績によって本年度五月に九段位となられたのですが、先生は永年本県居合道部の指導に当たって来られて多大にご尽力されており、十一月七日には会員一同が祝賀会を催してそのご功勞に対し深く感謝の意を表した次第です。

今年度も各行事に参加されている会員が一部の熱心な会員に限られていた点を、会員各自が反省点として次年度の第一の課題とすべきであるように感じます。

全国優勝への道のり

那賀川中学校 齋 浩 市

10月 郡大会 ……優勝

11月 忠臣蔵旗剣道大会（招待） ……優勝

11月 阿波中学校練習試合（上郡・楠根等） ……全勝

11月 県南大会 ……優勝（2軍）

11月 清原盃剣道大会 ……優勝

12月 県新人戦 ……優勝

12月 若鷲旗全国選抜剣道大会（上郡）

24〜28の4日間行われる。約一〇〇チーム ……ベスト8で神埼（佐賀

県）に代表戦で敗れる。優勝は高千穂。

結果的には、一年間でこの一敗だけになる。この時点での今年の優勝候補

は、高千穂・神埼の九州勢、小山三中・不動堂の関東勢、上郡そして、那賀

川ぐらいと確信した。練習試合の結果はAリーグで30勝2敗。

1月 四国放送大会 ……優勝

左沢高校の剣道トレーニング研究、羽浦中学校陸上部の見学、恵土先生

（金沢大学）の書物等で冬場のトレーニング作成。

適切なトレーニングは必要だと考える。結果的に成功。

2月 磯部旗四国選抜剣道大会（那賀川） ……女子は個人戦のみ

……優勝 2位

主将が出稽古で手の甲を痛める（全治2カ月）。

スポーツ障害についての勉強、腰痛体操の講習、東洋医学、テーピング等

を生徒とともに勉強。

防具店と衝撃吸収材使用の防具開発について相談。実用化になりそう。

3月（春休み）九州遠征（佐賀・高千穂） ……やはり、神埼に練習試

合で敗れる。京陵を初めて見て勢いを感じる。主将抜きでの戦い。

4月25〜26 赤穂市・上郡遠征

(吉備中、赤穂西中ほか) ……上郡に敗れる。副主将が捻挫(全治2カ月)。

主将が稽古で足の筋を痛める(全治2カ月)。…引退まで治らず。ハリ治療等。

5月2~4 広島遠征(庄原)

28戦全勝。60チームぐらい。…調整のため。

5月10 ライオンズ大会

富岡東高校出稽古

6月14 県選手権

21 白虎旗剣道大会(相生市)約○○チーム ……優勝

大変参考になった。近畿・中国・四国ではめどがたつ。…優勝

九州・関東の情報収集。やはり、九州がよさそう。京陵対策のため阿蘇高校の剣道を研究。神埼が少し不調な様子。高千穂、土々呂も研究。富岡東高校出稽古。

7月7 郡総体

12 高松遠征(調整) ……優勝、個人独占

19 練習試合(那賀川)県外6チーム ……全勝

26 県総体 ……優勝、個人1・2位

8月8~9 四国総体

富岡東高校、西高校出稽古。…優勝、個人優勝・3位

現在、全国で優勝するためには、まず九州の剣道を研究する必要がある。そして、よい所を吸収した上で乗り越える必要がある。

九州の中学生は『勝つ』ことに全力を挙げる。そういった姿勢を批判することは、ある意味ではたやすいことかもしれない。しかし、『剣道』の精神をその中心に置きながら、謙虚に学びとってこそ進歩もあるように思える。

そのためには、常に視野が狭くならないように留意しながら、時流を的確に把握することが大切だと考える。

昨年準優勝してから、この一年は全国制覇を意識しての一年となった。部員数も少なく、また道場も学校にない。そして、監督も素人同然。ケガにも

泣かされ決して楽な一年ではなかった。そんな中で目標を達成できたのは保護者、生徒、監督の『チームワークのよさ』に尽きるように思える。

また監督の立場から述べれば、『自分が素人だ』と割りきった所から型にとられない指導ができる強みもあったように思う。「よいと思うことは何でもやろう」「新しいことに目を向けよう」といった姿勢で生徒とともにとりにくんだ。もちろん失敗も批判も多かった。批判は謙虚に受けとめ反省し、また研究の材料にもなった。しかし、そういった積極的な失敗はチームの勢いを失わせるものではなかった。

また、努力は成就感を伴った時、更に前進する力につながることも生徒から教えられた。それは、試合においても毎日の稽古においても同様であった。(何かを成しとげたという気持ちは「メン」を一本打つことから生まれる。)部活動は義務教育の環である。「勝つ」ことよりも、「生懸命がんばる」ことの方が大切である。しかし、勝利を目指すことからチームは初めて「生懸命がんばる」ことも事実であるように思える。

このように、様々のことに悩みながら生徒と歩んだ一年であった。今、思い返してみると「感謝」の気持ちでいっぱいになる。それは、自分を支えていただいた全ての方々に対してであり、また同時に、苦勞を共にした生徒に対してである。



敷田 美紀さん

私達の目標であった「目指せ日本一」を果たせた時の感動は今でも忘れることができません。その感動を胸に秘め、これからもがんばっていきな



陶木 りえさん

昨年の悔しさ、今年の優勝といううれしさ、心の中でいつまでも忘れられない思い出です。



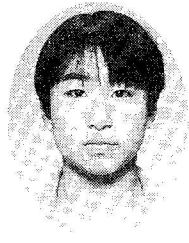
島田 誉子さん

この全国大会優勝は、私にとって記念になりました。この貴重な経験を忘れないようにこれからもがんばりたいと思います。



榎本 佳世さん

決勝までの緊張が、一気にうれし涙にかわりました。あの時の感動を、生の思い出にしたいと思います。



坪井さくらさん

試合、試合が心に残るものばかりでした。どの試合にしてもチームワークの勝利だったと思います。



賀川 由美さん

一つの試合が心にのこっています。自分の試合ができなかった試合もたくさんあったけれど、それもみんなみんな思い出となりました。



大坂 尚子さん

試合にはできなかったけど決勝戦の試合で勝った時はとてもうれしかったです。

全国教職員大会個人優勝をして

古川 久美子



平成四年八月九・十日の両日、地元徳島の小松島において全国教職員大会が開催されました。この大会に備えて、一年前から中屋誠監督を中心に、選手団が一丸となり稽古を積んできました。週に二・三度の合同稽古、機動隊との合同稽古、他県への遠征、合宿など計画され取り組んできました。大会まで、後一

カ月、一カ月、二十日と近づくにつれて選手団の盛り上がりも高まり自信も増していきました。その中で、大会を二週間前にして体調を崩してしまいました。気持ちは盛り上がり頂点に達しているにもかかわらず、体がついていかないという悔しさが、あせりになり「徳島県代表として絶対一回戦では負られない」という思いが脳裏をよぎる毎日でした。大会を目前にして「今まで稽古を重ねてきたことを出せるよう、精一杯やるしかない」と、気持ちを整理しイメージトレーニングを重ね、大会本番を迎えました。

大会当日、台風が過ぎ去り真夏の快晴の天候となりました。会場へ足を踏み入れると、本県の数多くの先生方、役員の方々を目にし「よし、やるぞ」と気持ち盛り上がりました。そして試合が始まり、一回戦は昨年度開催県の神奈川県代表の選手との対戦で苦戦しましたが、勝つことができました。二、三回戦では緊張も減り思い切り試合ができました。そして、準決勝をむかえ対戦相手は高校、大学時代に大変活躍された溝口選手との対戦でした。双方一本も決まらず延長、延長と続き積極的に技を出し、一本決まり決勝へと進むことができました。「あと、試合全力で行くぞ」と、気合を入れたおし決勝戦をむかえました。対戦相手は高校、大学と活躍され、昨年度の覇者である篠原選手、胸をかりるつもりで、必死に掛かっていきました。そして、一本を先取しましたが、試合時間も残り少なくなってきたその時、一本をうばわれ延長戦となりました。延長戦が続く中、つばぜり合いの時、篠原

選手が「ファイト、ファイト」とつぶやく声を耳にし気合が一層深まり合気になれ、気を許せない試合になりました。そして、延長三回目の時、もっとも自分自身が得意とする面が、決まり勝負がつかしました。その一本は、自身でどう打突したのか分からず捨て身で打突できた技で三本の旗を目にした時、胸の奥から込み上げてくる何かが涙となってこぼれました。

今回の大会は、本当に信じられない優勝で、感動と驚きで一杯でした。この大会の運営をして下さった方々ならびに役員の方々、そして選手の方々には色々とおアドバイスを頂きました。本当にお世話になりました。これからも日々努力していこうと思っています。

四国高校剣道選手権大会で得たもの

富岡東 大城 夏子

「一試合目から全力で、そして悔いの残らない試合をしよう。」

全員一丸となり、最後まで頑張ることを一人ひとりが心に誓った。昨年この大会5連覇を目指し惜しくも、優勝を逃していることもあって、今年は負けるわけにはいかなかった。予選リーグで優勝候補である高松南を3対2で破り、3戦全勝で予選リーグを突破し、チームが波に乗ってきたところでもう一度気を引き締めなおし、準決勝では地元の高知県一位の高知商業を気力で破り、やっと決勝まで上り詰めた。

決勝の相手は、上段が2人で粘り強い試合運びをして勝ち進んできた、高知県の岡豊高校、「受けに回らぬよう、攻めて攻めて、思い切り技を出せ」との先生の指示に全員で気力をふりしほり、攻撃し3対0で勝ち、2年ぶり5度目の優勝を果たした。振り返ってみると、どの試合も苦しく勝ち続けることは決して容易ではなかった。もし誰かが途中であきらめてしまったり、みんなが戦っているということをおぼえてしまっていたら、優勝の喜びはなかったと思う。日々苦しい練習に耐え、その中で得た精神力、自信、チームワークそれらが一つになり、気力となってはじめて優勝という栄光を掴むことができたということをおぼえてほしい。

インターハイに出場して

富岡東高校 山崎 砂織



私達は8月2日から4日まで宮崎県高千穂町で行われた全国高等学校総合体育大会に出場しました。

初めてのインターハイ出場なので不安と緊張感で一杯でした。

第一試合が始まるまで私達は旅館で待機をしていました。他の試合の進行を知らせる電話がない限り緊張をしていました。そしてウォーミングアップも少し軽めにやりました。

第一試合は埼玉県の埼玉栄高校でした。一昨年の石川県体、若潮杯と負け続けていて「今度こそは」という気持ちで相手に胸を借りるつもりで試合に挑みました。やはり埼玉栄高校は強く、なかなか勝たせてはもらえませんでした。結果は3対1で勝利しました。が、私は左肩を脱臼してしまい満足のいく試合内容ではありませんでした。

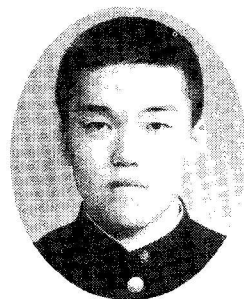
第二試合では練習試合で対戦している岡山県の作陽高校でした。作陽が埼玉栄に1対4で負けていたので、5人の内2勝と4本取れば決勝トーナメントに出場できたが、先鋒、次鋒と勝ち、副将の本で進出が決まり、2対2の本数勝ちで、予選リーグ2勝で、ベスト16へ進出しました。決勝トーナメントの相手は、優勝候補でもある鹿児島県の神村学園、そこは、インターハイの一週間前に、合同合宿で何回か練習試合を行い、一回も勝てずに悔しい思いをしていました。だから今度こそは、「勝ちたい！」という気持ちで試合をしたけどやはりそう簡単には勝たせてはくれませんでした。やはり全国の壁は厚く4対1という大差で涙を呑む事になり、ベスト16という結果で私の高校生最後の夏は終わりました。

たぶん私の一生の中で忘れる事のできない大会だったと思います。

インターハイに出場できて本当によかったです。今年も、後輩達に私の思い出以上のものを作ってほしいと思います。

自分の中の壁

富岡東高校三年 磯部 健治



6月21〜22日の間、高知県立武道館において四国高校総体が行われた。昨年度優勝者として「四国総体・連覇」というプレッシャーを背負っての出場であったが、自分としてはあまり意識せず、昨年は昨年、今年は今という気持ちで試合に臨んだ。

一回戦、二回戦と勝ち進むうちに次第に自分の持っている力以上のものが出てきはじめた。準々決勝は、高松・高の藤井望選手との対戦、果敢に攻め込んだが、なかなか一本にすることができず延長戦を数回繰り返したのち、出小手を決めた。準決勝の対戦相手は同じく高松・高の江崎選手、時間内では決着がつかなかったが、延長・回目で相手が小手を打ってきて外したので、面を決めて勝った。苦戦の連続ではあったが、決勝戦まで駒を進めることができ優勝へあと一歩と迫った。

そして決勝戦、高松西高の花田選手である。自分は、試合開始と同時に全力を出して攻撃した。が面を取られ、一本負けで準優勝となった。

部の練習のほかに出稽古等をさせていた体には自信があったのだが、この決勝戦は疲れが出てきはじめたのが敗因かもしれない。が、それは言い訳にすぎない。決定的な敗因は、優勝という二文字が心の中のどこかに少しでもあったからなのだ。と試合終了後考え、そして反省した。

自分だけでなくほかの選手も試合における同じような経験や、日常生活や部活において自分の甘さや弱さ、調子が悪くなったなどのいろいろな壁に直面したことがあると思う。その自分自身の心の中の厚い壁を乗り越えてこそ本物なのだ、この試合で学んだ。

結局、「連覇を手にする」とはできなかったが、様々な大会に出場して賞を取り、また、自分の剣道をいかなる条件でも維持することができるようになったのも河田先生をはじめ、先輩の方々、そして御指導くださった諸先生方のおかげだと感謝している。

高校時代に学んだことを、これからの自分の人生に生かしていきたいと思う。

全国大会に出場して

市場中学校 佐藤 智

第22回全国中学校選抜剣道大会が8月22・23日と福井県立武道館で行われました。

21日、僕は練習会場である松本小学校へ練習をしに行きました。昼ごろまで練習をして、午後から試合会場である武道館へ行きました。武道館の中へ入り、僕達は明日ここで試合するんやなあ。絶対に頑張ろうや」と心に決めて武道館を後にしました。

22日試合当日、僕は朝早く旅館の近くにある永平寺へ必勝祈願をしに行きました。「この3年間、僕は今日のために一生懸命練習をしてきました。今日は自分達の力がすべて出し切れますように。」と願って試合会場の武道館へ行きました。前日、この武道館を見てどんな雰囲気、武道館かわかっていたはずなのに試合当日見た武道館は、前日見た武道館とはまったく違う別の物のような気がしました。自分の視界に入ってくるものすべてが「全国大会」という感じをだしていました。僕はよほど緊張しているんだな、と思っ自分の気持ちを落ち着かせました。

開会式が終わって個人戦も終わってよいよ団体戦です。はじめは予選リーグを行うのですが、僕達のリーグには長崎県の長崎南山中と千葉県の国吉中がいました。1試合目は長崎南山中とでした。僕はほどよい緊張感とやる気に包まれて試合に臨みました。しかし、結果は1勝3敗で負けてしまいました。僕は試合に負けたショックと予選突破の夢が壊れたことで、おちこ

んでいましたが、みんなで「さっきの試合のことは忘れよう。今は次の試合のことだけに集中しよう」と言いあって次の国吉中戦へ向けて気持ちを入れかえました。そして結果は2勝1敗で勝ちました。個人戦では準決勝で奈良県若草中の上垣選手に負けてしまいましたが、全国ベスト8ということで自分では満足しています。

予選リーグ2位、全国ベスト8とここまでやってこれたのも佐藤先生や先輩方のご指導のおかげだと思います。みんなの目標であった全国大会出場をはたせただけでも本当にうれいしいです。後輩のみんなには苦しい練習にもたえて、全国大会出場、予選突破と僕達をこえるように頑張ってもらいたいです。

全国大会に出場して多くのことを学びました。この学んだことを、これからの剣道に生かして頑張っていこうと思っています。

第十四回全日本高齢者武道大会に参加

徳島県高齢剣友会 理事長 西野 四郎

平成四年六月十五日(月)日本武道館において第十四回全日本高齢者武道大会が開催された。

清原栄範士以下十六名は第二回大会から連続十三回日の参加である。本大会も年と共に充実したものととなり、本年の参加者は実に八十二名内剣道は五十二名の多きに及んでいる。

今回の大会では優勝、準優勝を同時に獲得するという誠に輝かしい成績を挙げることが出来ました。

平岡竹雄七段が特組(75~79歳)において、晴れの全国制覇の偉業を成し遂げた。これは勝浦守七段が第十回大会A組(70~74歳)で初優勝してから四年日の快挙となった。

先生は準決勝で東京都・西山進七段(第三回大会優勝者)と対戦し見事に小手二本で完勝。決勝戦では一七〇種は優にある二刀流千葉県押本孝一七段との対戦となったが、先生は臆することなく、回を重ねる毎に気迫充実、特

に二刀に備え前後左右によく動き、打突の機を窺う。流石の二刀流押本先生も決勝戦では、やや疲れが見え始め動きが鈍くなったかに……そこを裂帛の掛声諸共面に見せての飛び込み胴からの体当たりが効を奏し場外反則を誘うこと二度、相方共に、技らしい技の無いまま時間切れとなり、反則勝優勝を飾ることが出来ました。このような優勝は本大会始まって以来の珍しい記録であり、場内一瞬啞然とす。

遠藤一美七段はB組(65~69歳)で準優勝(第十二回大会三位)の立派な成績でした。

準決勝では第十一回大会の優勝者、福岡県・横尾治射七段を鮮やかな面打ち一本勝ち。決勝戦は埼玉県・今栄俊一郎七段と対戦、接戦の末、惜しくも面を取られ一本負け涙を呑んだ。

準優勝は第六回大会で清原栄七段がA組で達成して以来実に八年振りの偉業である。

平岡・遠藤両先生本当にご苦勞様でした。ご健闘をたたえ心から祝福申し上げます。

徳島県高齢剣友会 事務局長 南 充美

(一) 平成四年度徳島県シルバースポーツ・フェスティバル剣道交流大会

とくしまッあいッランド推進協議会主催の徳島県シルバースポーツ・フェスティバル剣道交流大会が平成四年七月十九日(日)九時から県立中央武道館で開催された。

県下の六十歳以上の剣士が、日頃修練した成果を発揮すべく続々と集まった。

大会は大会会長徳島県知事三木申三氏に代わり徳島県福祉生活部長古川文雄氏の挨拶から始まり、審判長から試合上の注意を聞いた後、直ちに演武に入った。打太刀遠藤一美・仕太刀株木芳夫両先生の素晴らしい日本剣道形、平尾勝美・野口直之両先生の格調高い居合道英信流がそれぞれ披露された。

試合は支部対抗の団体試合から始まり、個人戦は(A)大正十二年生以上と(B)大正十三年生以下の二ゾーンに分けて実施された。個人戦終了後、第五回全国健康福祉祭山梨大会選抜出場選手と参加者から、チームを編成し対抗試合が行われた。

成績は次の通り。

○団体戦 十一チーム参加

優勝 小松島支部

準優勝 阿南支部A

三位 板野支部・徳島支部A

○個人戦(敬称略)

A組 優勝 早川一也、準優勝 西野四郎、三位 平岡竹雄・松本英雄

B組 優勝 遠藤一美、準優勝 勝沼信彦、三位 株木芳夫・高田 豊

○山梨大会出場選手との対抗試合は3勝2敗で出場選抜チームの勝利で終わった。

試合終了後約四十分の合同練習で快い汗を流しお互いの交流を深めた。

閉会式では主催者側よりそれぞれ入賞選手に賞状賞品を授与され全日程を終了した。

(二) 第七回徳島県高齢者剣道交流大会開催

平成四年九月二十七日(日)午前九時から県立徳島中央武道館にて第七回県下高齢者剣道交流大会が開催された。

大会は秋日の好天気にも恵まれ、六月に開催された全日本高齢者武道大会で剣道特組の平岡竹雄先生が優勝、B組で遠藤一美先生が準優勝と活躍されたこともあり、県下各地から修練を重ねてきた錬達の上が大勢参加された。

交流試合も土佐生涯剣友会(門田理事長以下十名)と東京より全日本高齢剣友会(松島理事長外七名)の先生方が今までになく多数参加され盛りあがった試合が展開された。

午前九時三十分開会、形通りの式次第に基づき主催者徳島県高齢剣友会清原栄大会長の挨拶があり、来賓祝辞として全日本高齢剣友会松島理事長よりお言葉をいただきました。

続いて中川虎雄審判長より「試合上の注意」があり、直ちに演武に入った。打太刀教士七段早川一也・仕太刀教士六段株木芳夫両先生の日本剣道形に続いて、居合は英信流の教士八段平尾勝美・教士七段野口直之両先生がそれぞれ素晴らしい格調の高い技を披露された。

演武終了後、直ちに各支部対抗の団体試合に入った。(今年は先鋒・中堅・大将の三人編成にして同支部より数チーム出場できるようにした。)団体戦では徳島支部Bが決勝戦で徳島支部Aに得点差で敗れたがその活躍が目立った。個人戦はA組で三年連続で西野四郎先生が優勝を飾った。

団体、個人戦共に終わり昼食後県外チームとの三者団体リーグ戦が繰り広げられた。

各試合とも年齢を感じさせない、若さあふれる好試合で、熱戦の連続迫力十分気魄に満ちたものであった。

例年のことながら試合終了後、約四〇分間合同練習会で思う存分快い汗を流してお互いに親睦を深め有意義な練習で終わった。

成績は次の通り。

一 団体戦

優勝 徳島A支部、準優勝 徳島B支部、三位 阿南A支部・小松島支部

二 個人戦(敬称略)

A組 優勝 西野四郎、準優勝 蝦名久作、三位 前林利雄・堤 茂

B組 優勝 高田 豊、準優勝 森本好美、三位 阿部三十三・小川本書

C組 優勝 遠藤一美、準優勝 浜田逸郎、三位 株木芳夫・南 充美

○東京・高知・徳島団体交流試合

徳島 一勝、高知 一勝一敗、東京 二敗

第五回全国健康福祉祭

山梨大会に参加して

徳島県高齢剣友会 理事 株 木 芳 夫

「ねんりんピック九二やまなし」に参加するため、平成四年十月三十日県庁で結団式後、徳島空港へ向かう。羽田空港からバスで河口湖に行き一泊。

選手役員一三三名。三十一日は甲府市小瀬スポーツ公園で常陸宮殿下ご夫妻をお迎えしての開会式。聖火入場には武田信玄公率いる二十四将の騎馬隊がつづぎ他に例のない圧巻というべきであった。

さて、剣道交流大会はつづいて十一月一・二日の二日間、山梨市民体育館で行われた。

本県からは予選を経て監督西野四郎、大将平岡竹雄、副将山田富康、中堅上井司、次鋒阿部三十三、先鋒株木芳夫、補員南充美の七名のメンバーで加した。

第一日午前中は開始式。午後四時からの第一戦は群馬県と対戦する。運よく四勝一敗で勝ちを決める。

第二日午前九時より始まり、宮崎県と対戦する。九州勢はみんな強いであろうとの予想の通りで、勝四敗で終わり、決勝リーグの夢は消えてしまう。

県庁の方から何かとお世話いただいたのに、それにこたえることもできず残念至極。来年の京都には是非決勝リーグに進むのだと期して精進したいものである。

(優勝は兵庫県、準優勝愛媛県、三位山梨県とのことである。)

幸運な七十八歳

平岡 竹雄

平成四年六月十五日、東京の空は梅雨気配もなく澄み渡っていた。私達、徳島高齢剣友会十六名は、宿舎からタクシーで九段の靖国神社を右に見て、その左側に偉容を誇る日本武道館の玄関先に着いた。

今日ここで、待望の第十四回全日本高齢者武道大会が行われる。全国老人福祉助成会(会長大隈信幸)主催。全日本高齢剣友会共催。総務庁、厚生省、文部省、東京都等の後援で剣道・銃剣道・なぎなたの三道に全国各地から八二二名が出場し午前九時から開会式・演武開始で古来の武道の精華が発揮される大会となった。

剣道は年齢別に、傘寿組(八〇歳以上)、特組(七五〜七九)、A組(七〇〜七四)、B組(六五〜六九)、C組(六〇〜六四)とし、トーナメント方式で優勝、準優勝、第三位(二名)、敢闘賞(一名)を決定する。私は本年で連続十一回目の出場で長男と末子が東京に勤めているので子や孫の訪問を兼ねての大会参加である。試合番組を見ると、私は七十八歳で特組(一)組の九十七名中(一)組の途中で名があり幸いに一回戦不戦勝である。

二回戦にあう一回戦の勝者は神奈川県津田氏と決定、その試合を見ることが出来た。小手を得意と見た。よし自分も逆手に小手で攻めようと立合った。遠い間合から思い切って小手に打込む確かな手応え、二本目も真っしぐらに攻め込み業に出んとする端を捕らえて小手を打った。面をぬぐと、私の肩をたたいた人物がいた。東京都の斉藤七段であった。三年前の試合にお互いに五回戦まで進んで対戦した。その時私は彼に面一本をとられて負け、三位入賞を目前にして涙を飲み、彼は見事準優勝に輝いたのであった。「久しぶり次の三回戦で、また対戦です」「全力で戦いましょう」と握手を交わして出番を待った。

斉藤氏は今日小手を取っている。二人の試合の開始となり友情の中にも不思議な闘志が湧くのを覚えた。

斉藤氏との対戦も遠い間合から左足を右足迄送り小手に飛びこみ一本をと

り、二本目も攻め込んで挙げ小手を頂いた。試合が終わり相手から、「今日はお見事、この調子で優勝を目指して下さい」と激励してくれ、その後もアトバイスを惜しまなかった。有難い剣友である。

次に私の戦跡を表示する。

一回戦	二回戦	三回戦	四回戦	五回戦	六回戦	優勝戦
平岡 小勝 コテ	平岡 小勝 コテ	平岡 小勝 コテ	平岡 小勝 コテ	平岡 小勝 コテ	平岡 小勝 コテ	平岡 小勝 コテ
津田 神奈川 ○	東京 齊藤 ○	神奈川 上丸 コテ	静岡 米山 ○	東京 西山進 ○	千葉 押山孝 ○	本勝 場外 反則

三回戦が終わり、私にも少し自信と希望が生まれた。上丸氏との四回戦でも先の小手を取り、私は初めて小手を奪われた。しかしその直後相手のホツとした隙に乗じて面と見せて、鋭い鋭角の胴を打って勝つ。五回戦は六回の中で唯一人関東外の静岡の米山氏である。本日は飛び込み面を決め、後は小手で連勝である。

六回戦は東京の西山氏が偉丈夫の颯爽たる剣士である。しかし私は敗けても三位入賞は必至だから捨身一筋の先の攻めを念じて、無我夢中で、小手二本を案外に早く取る事が出来た。後で勝浦先生から、西山氏は講談社野間道場の師範で徳島の剣友がお世話になった方だと知らされ不明を恥じた次第である。「めくら蛇におしず」で怪我の勝ちである。ここでも幸運さが実感された。遂に特(二)の優勝は昼頃から異彩を放って勝ち進んだ。二刀流押本氏が私の面前で難戦を克服してかち取られた。全く夢想もしない特組の優勝戦が不敏な私と二刀流宗家という押本氏の間で争う事になった。私は休養十分だが押本氏は戦い後休養せず決勝戦にすぐ立ち上がった。私は上京の前に何気なく小川金之助師範上の「剣道教本」を開き、二刀流との戦い方の一項目を読んだ。曰く、「間合を遠く取り、小太刀に泥まらず、大太刀のみに対する心持が大切である」と。今こそこの教えを守って戦おうと決意した。右手に大太刀を上段につけ、左手に小太刀を正眼に取る。私は遠い間合から小太刀の防御を全く相手にせず、大太刀の横面へ、小手へ、胴へと息もつかず攻め立てた。

ふと私の視線に場外の境の白線が映った。すぐ面に出て、その竹刀を相手の胸へ当て体当たりを敢行した。重心が上がっていた相手は場外へ転倒し、私は竹刀を相手の面上に構えたまま打たず元の位置へ。相手に審判は「場外反則一回」を宣言する。試合再開、また同じパターンで相手を追いつめて、剣と体との相乗的な体当たり二回目、よろよろと、また相手は場外へ崩れて行った。遂に相手が場外反則二回で私に一本の勝点を与えられ、技の応酬が数秒で三分の時間切れで、私に「本勝ち勝負あり」、これが特組優勝である。内閣総理大臣宮澤喜一の優勝の賞状と優勝杯が私に授与された。不思議な勝運であった。

全試合が終わり押本氏が高弟の樋口氏(埼玉B組)を伴って来られ、今日の私の勝利を祝福し記念に今日の愛刀大小二本を二人で差し上げますと言われた。試合用の愛刀は恐縮だと固辞したが、私が帰郷して日ならず、墨で銘を入れた大小の竹刀と二刀流の秘伝書を添えて、一期一会の縁を大切に今後剣友としてご親交をと鄭重に極めた物心両面の御芳情に感激した次第である。

私も下手ながら剣を学んで六十五年、剣を教えて五十五年がたつ。剣道は稽古で師弟が同行の汗を流しむものだと感じている。そして教学・体が剣道の真骨頂だと思う。

齢(トシ)ようやく数え年で傘寿であるが、足腰の立つ間は斯の道への精進を怠らない積もりである。今次の栄光も老骨の私への神の啓示であると思う。

ここに永年にわたり御指導頂いた諸先生、高齢剣友会、剣道連盟の各位に御礼を申し上げたい。青少年の諸君も反面教師の役割を頂いたと思うと有難い。

全日本大会での拙い短歌を御覧願って稿を終わる事にする。

打振れる竹刀に期する名利なしただ好む故に努め米にけり
靖国の九段に近き武道館高齡剣士の気合こたます

決戦に相目見えたる二刀流ただ無心なる攻めに幸はふ

新緑の巡る九段の道場に首相の栄えある金杯を受く

子等を教え我も学びて六十年教学一如の剣を楽しむ

勝つも良し負けるも恰(たしか)し生涯を剣のすさびに汗を惜しまず



全日本居合道大会

監督 平尾勝美

平成四年度第二十七回全日本居合道大会は十月十八日東京武道館において盛大に挙行されました。

各県代表選手が一堂に会し堂々の入場行進に続いて全日本剣道連盟会長、

大島功先生の挨拶、東京都剣連よりの歓迎のことば、審判長説辞の後、五、

六、七段各々の試合場にてトーナメントによる試合が開始されました。

本県五段の部坂本選手は一回戦無事通過二回戦に駒を進めましたが、指定技間違いのため惜しくも敗退しました。

六段の部吉岡選手は安定した技前で善戦しベスト8入りを果たすかと思われましたが、その寸前で惜しくも敗れました。

七段の部高橋選手も良く頑張りましたが上位進出は出来ませんでした。午後各試合場一斉に優勝戦が行われ各段の優勝者が決まりました。団体の成績としては六、七段を制した東京都が四年連続の優勝を飾りました。

今回の大会は静かな雰囲気の中にも、白熱の気迫が剣先に込められた烈しい太刀さばきが見られ実に見応えのある立派な試合が見られました。これは全国的に技量が向上した事を物語って居るものと思われれます。本県においても他県に遅れをとることなく一層の精進と努力を重ねて参らねばならないことを痛感致しました。来年を目指し更なる修練を積み皆様の御期待に添える様居合道部一同相励まし合って頑張って参り度いと念願して居ります。

尾形郷一先生を偲んで

徳島県剣道連盟名誉会長 三木 只雄



先生は明治二十九年一月十三日、父善吉氏の長男として鳴門市大津町大代にて誕生された。座右の銘は「誠」と「忍」で、性格は清廉潔白、しかも剛直にて誠実でありました。

先生は明治四十三年四月県立撫養中学（現鳴門高校）へ入学され、武田長年師より剣道の指導を受けられました。私と尾形先生との出会いは、小学校五年生の時の担任で指導を受けてからのことです。体操の時間に竹を持って来いと言われ、剣道の基本を教わりました。私が先生のお宅に伺うと、いつも話は剣道に関するものばかりでした。

先生は放課後には、当時交通の便の悪い鳴門から徳島の武徳殿へ稽古に通われ、春休み・夏休みには京都の小川金之助先生のもとで修業され、また居合道は香川県の植田平太郎先生の道場に通われたものです。後ついに自宅に貫心館道場まで作られるという熱心さでありました。

戦後進駐軍の剣道禁止令の不幸の中で、是非剣道を復活したいと東奔西走され、その熱意にさすがの進駐軍司令も剣道の再開を認め、先生は初代会長に就任されるとともに物心両面にわたり多大の貢献をされ、今日の徳島県剣道連盟の基礎をつくられたのであります。

また居合道の修業に心血を注がれ、全国居合道連盟を結成、自らその会長として多くの後進育成に寄与されたのであります。先生は、百二十歳までは生きて修業したいものだとおっしゃられました。残念ながら平成四年六月二十四日、九十四歳で眠るがごとく大往生されました。

本県の剣道を回顧する時、戦後のきびしい社会背景から復活させた初代尾形郷一會長の足跡は、本県剣道のある限り、未来永劫、後進の忘れられない先達であります。

明治四十三年四月 徳島県立撫養中学校（現鳴門高校）入学

大正三年
同 三年十月

同校卒業（第一回生として）
大日本武徳会徳島支部板野東部支所剣道教授拝命

同 四年

徳島師範学校第二部卒業

同 十一年九月

剣道範士山根正雄先生より貫心流免許状拝受

同 十二年五月

剣道範士山根正雄先生より貫心流剣道皆伝拝受

昭和九年五月

梨本宮守正王殿下より貫心流練士の称号拝受

同 十年四月

大日本武徳会本部より剣道五段の免許状拝受

同 十三年五月

貫心流・宗家となる

同 十三年六月

板野郡北島南小学校訓導兼校長退職
（教員生活二十三年間）

同 十三年六月

任三等郵便局長、大代郵便局長（二十四年勤務）

同 十五年六月十七日

紀元二千六百年奉祝武徳大会に剣道府県選手として徳島県を代表して宮城内濟寧館の御前試合に出場（六月十七、十八、十九、二十日の四日間）

同 十五年十一月十日

紀元二千六百年祝典記念章拝受

同 十六年十二月十四日

司法保護委員拜命（三十一年間勤務）

同 十八年二月一日

従七位拜受

同 十八年四月二十五日

剣道貫心館長（剣道居合道指導）

同 十九年一月

徳島地方・家庭裁判所調停委員拜命（三十一年間勤務）

同 十九年三月三十一日

大日本武徳会会長（東條英樹）より居合道練上拝受

同 十九年十二月三十一日

無双神伝抜刀術兵法十七代宗家（植田平太郎竹生師）より十八代宗家継承

同 二十四年十月二十六日

徳島県社会体育剣道クラブ会長（六カ年勤務）

同 二十八年五月二十五日

剣道教士称号を会長木村篤太郎より拝受

同 三十年一月十二日

弘道館長小川金之助より剣道八段免許

同 三十一年二月五日 終戦後剣道振興功労者として徳島県体育協力会

長より表彰さる

同 三十一年十一月二日 体育振興功労者として鳴門市教育委員会より表

彰

同 三十三年四月十九日 徳島県保護観察所長より表彰

同 三十四年五月七日 四国地方保護司連盟会長より表彰

同 三十七年五月四日 体育振興功労者として鳴門市長より表彰

同 三十八年六月八日 更生保護事業功労者として紺綬褒章拝受

同 三十九年六月十三日 全国保護司連盟会長より表彰

同 三十九年九月十九日 東京オリピックを記念して体育功労者として

徳島県体育協会長より表彰

同 四十一年十月五日 最高裁判所長横田正俊より表彰

同 四十三年四月二十九日 勲五等瑞宝章拝受

同 五十一年十二月十五日 全国居合道連盟会長就任

中村公二先生を偲ぶ

板野西支部 徳島県剣道連盟理事 岡 島 茂 雄

板野郡吉野町吉野少年剣道教室の指導者として、昭和五十七年頃から薫陶を賜った先生が体調をくずし静養中の平成四年十一月十四日夜、心不全に因り逝去されたことについては県下剣友のお耳に入っていることと存じますが、将来を囑望されていた先生の霊界へ昇天の悲報は同好の者として暗涙に咽んだものです。ここに故人の行跡を偲んで拙文を捧げます。

先生は那賀郡上那賀町鳴瀬字田中一九、森林伐採業中村森一氏の五男として出生、現在家族は徳島市矢三町六一二四に居住し、生前は麻植郡鴨島町西麻植松下工業有限会社へ幹部社員として勤め、一日の仕事を終え帰宅前に吉野少年剣道教室へ来られていた。

先生が少年時代から鍛え込まれた得がたい体験を通じての教え方は厳しい中にも親切心豊かなお人柄を慕って多くの少年と、その父兄のうちのママさ

ん剣士達に信頼され尊敬されていました。特に女性の初段・二段の取得者が増え吉野町民センターの道場が狭いため吉野中学校校体育館に練習場を移し、今日に至っている現況であります。

先生が急逝されたお通夜には三木剣道教室長を初め父兄と共に伺いし、枕頭でお別れのことばを述べ落涙とどめ得ない有様でしたが、『好きな剣道で倒れたのだから本人も幸せ』と言うご兄弟の言葉は忘れ難いものとなりました。昨年五月七日京都市で剣道六段審査を受け第一回で見事に合格し、そのすばらしい剣の運びの小手打ち等が審査員の目に止まり、お告めの言葉を頂いたことも、緒に審査を受け、受験を勧めた者として懐かしい思い出となりました。

平素先生は『剣道は芸術、打撃は美しいもの』という信念で、打つも打たれても姿勢をくずさないで、抜き面などを正剣大技で打ち、その打撃後の残心は、ああ打ったなという実感があり、また実戦向きの技でもありました。先生の先輩・知人にお嚮をうかがいましたら幼年時代は体が弱かったため小学生時代より剣道を始め本籍地近くの木頭会館や大和錬心館館長大澤善次郎先生の道場で修業を重ね、大澤先生の一の弟子として将来を期待されていたもので、同郷の徳島市内在住西岡先生の思い出話に依ると、その時代には県下で高名の高島・尾形・山家先生が出張稽古に来たときは何時も呼び出されてご指導を受けたことが幾度もあり、この時代に後年の実力が築き上げられたとのことです。

当時、平谷警察官駐在所のお巡りさんに見込まれて警察の剣道大会に出たこともあり、その後徳島市内へ転住し県下の青年大会、社会人大会、西日本勤労者剣道大会にも選ばれて出場した経歴があり、その殆どが大將として活躍し、大半は負けを知らない好成绩を残しており、昨年七月には徳島県剣道連盟より四十周年記念に、表彰状を授与されており、先生を知る人は一様に将来県下で有能な指導者として数えられる惜しい人であったと懐古されています。六段合格の際作られた『心身一如』の手拭は先生の形見ともなりましたが、生前におけるご指導に対し心より感謝しお礼を申し上げますと共に霊界に転生された先生の魂修業としてのご精進とお幸せを切にお祈り申し上げます。

平成四年度各種講習会参加状況（順不同）

平成四年度居合道春季講習会 4月5日 於中武

平尾勝美、張野久晴、原田勝、小野寺恒義、高橋憲司、前田健志、吉岡修一、青木茂生、松村宏道、岸田光博、森将夫、鈴江正雄、福井勝、川西英爾、齊藤吉明、村昌和、坂本憲一、宮和雄、高野康實、吉田正雄、松田明治、松村博行、満寿良史、中川正、中津川誠子、工藤澄、林理、平瀬進也、山本正司、乘原栄治、新見和彦、四宮博、三好博、関口公司、西本忠司、小引健、中川芳文、西原仁、少年5名

平成四年度春季講習会、4月11日～12日 於鳴武

▽徳島支部 堀江幸夫、大沢孝彰、勝浦守、西野四郎、小川本吉、田村清憲、柏原浩、馬場力、山田仁、森川澄、橋本武、岡崎明、忠津和憲、南充男、藤本辰夫、松林保、石本芳照、手塚十三子、糸田川文男、堀家賢、谷口誠、▽板野東 大野義則、武田修典、▽鳴門 佐藤勇、伊賀上仙市、前林利雄、▽板野西 高田豊、高田亮、吉永明彦、福永徳、岡島茂雄、金西重記、糸谷文男、▽阿波 村昌和、▽三好 来代眞治、合田秀實、徳永賢二、▽美馬西 三好正也、▽麻植 川真田高太郎、▽名西 白木洋一、阿部全司、遠藤英雄、加藤泰男、稲井一雄、▽阿南 清原栄、遠藤一美、北條憲治、株木芳夫、有賀秀敏、西岡侃、土井司、阿部三十三、白浜昇、平正明、米山藤男、森眞一、鎌田吉仁、▽丹生谷 雄西義春、岡田豊、▽海部 美馬和義、影山美雄、▽警察 坂下彦之、松村克隆、近藤亘、吉田昌彦、出葉成、▽刑務所 鈴木伸

平成四年度四国地区講習会（香川） 5月30～31日

▽徳島支部 忠津和憲、南充美、▽鳴門 佐藤勇、前林利雄、▽板野西 吉永明彦、松田三子、▽美馬東 青木茂生、▽美馬西 三好正也、▽三好 来代眞治、合田秀實、▽名西 久保隆司、▽警察 松村克隆、近藤亘

平成四年度居合道秋季講習会 11月7日 於中武

平尾勝美、張野久晴、原田勝、小野寺恒義、高橋憲司、前田健志、野口直之、吉岡修一、青木茂生、松村宏道、川西英爾、齊藤吉明、坂本憲一、岸田光博、岡田育幸、鈴江正雄、福井勝、早川幸男、満寿良史、吉田正雄、枝沢正巳、一宮和雄、高野康寛、松村博行、林理之、平瀬進也、山本正司、新見和彦、四宮博、乘原栄治、関口公司、西本忠司、岸田千穂、森本秀代、木村精伯、猪籠生洋、小引健、中川芳文、西原仁、他少年2名

平成四年度剣道寒稽古 平成5年1月4・6・7日

○3日間

堀江幸夫、平岡竹雄、西野四郎、坂下彦之、松村克隆、米倉滋、近藤亘、佐藤勇、白木洋一、青木博志、平野誠司、佐賀博史、岩木一功、玉田晋作、竹内佳代子、南谷雅彦、小坂浩、徳島中学校剣道部

○2日間

石井克太郎、中川虎雄、遠藤一美、田村清憲、柏原浩、東内勉、馬場力、稲木紀、岡崎明、来代眞治、金西清、林清、糸谷文雄、手塚十三子、吉田茂生、本村賢二、手塚英治、武岡美智、文理中学校剣道部、川内中学校剣道部、上板中学校剣道部

○1日間

吉田租、福井昇二、美馬勝行、森川澄、坂本信幸、中山繁輝、藤本辰夫、前林利雄、白木崇、近藤康次、茨木基良、石本眞希、板野中学校剣道部、東上業高校剣道部、徳島市立高校剣道部

平成四年度 戦いの跡

〔県内〕

◇第17回会長杯争奪高校剣道大会

(4月19日(日)城ノ内高)

〔男子〕

▽準決勝

川 島1(3) ー (1)0 文 理

小松 島4(7) ー (3)1 阿南工

▽3位決定戦

文 理2(5) ー (4)1 阿南工

▽決勝

川 島3(3) ー (1)1 小松島

○白石 コ ー 福住

○小原 メ ー 川添

吉田 × 木下

坂東 ー コ 松村 ○

○兼松 コ ー 佐々木

〔女子〕

▽準決勝

川 島3(3) ー (3)2 富岡西

富岡 東4 ー 0 小松島

▽3位決定戦

富岡 西3(5) ー (3)1 小松島

▽決勝

富岡 東4(6) ー (0)0 川島

○猪尾 メ ー 田島

笠松 × 横山

○山崎 メ ー 栗栖

○大城 メコ ー 河野

○小籾 メコ ー 秋山

◇第16回山家旗争奪県下剣道大会

(4月26日(日)鷺敷町民体)

〔中学校〕

優勝市場中学校 2位鷺敷中学校A

〔高校男子〕

優勝城ノ内高校 2位小松島高校

〔高校女子〕

優勝富岡東高校 2位川島高校

▽五人以上勝ち抜き ○七人勝ち抜き

城ノ内高・佐野伸治、川島高・

铸形智也 ○六人勝ち抜き 阿南工・

大城圭司 ○五人勝ち抜き 那賀高・

福井和明、富岡東・磯部健治、文理
高・小林隆志、川島高・田島希実子

◇第44回四国四県剣道大会

(5月24日(日)鳴門武)

▽順位 ①徳島2勝1敗(本数勝ち)

②香川2勝1敗 ③愛媛1勝2敗

(本数勝ち) ④高知1勝2敗

◇第32回徳島県高等学校総合体育大会

(6月6日～8日城ノ内高)

第2日目

〔男子団体〕

▽準決勝 城ノ内2(4) ー (2)1 川島、

文理5(7) ー (0)0 海南、富岡西3(5) ー

(4)2 阿南工、小松島4(5) ー (2)1 徳島

市立

〔女子団体〕

▽準決勝 富岡東5(10) ー (0)0 生光、

小松島3(4) ー (0)0 城南、富岡西5(9)

ー (1)0 脇町、川島5(10) ー (0)0 徳島市

立

第3日目

〔男子団体〕

▽決勝リーグ 城ノ内2(4) ー (3)2 富

岡西、城ノ内3(6) ー (4)1 文理、城ノ

内2(2) ー (2)1 小松島、富岡西2(4) ー

(4)2 文理、小松島3(4) ー (2)1 富岡西、
小松島5(6) ー (1)0 文理

▽順位 ①城ノ内3勝 ②小松島2
勝1敗 ③富岡西1分2敗(勝者数)

④文理1分2敗

〔男子個人〕

▽決勝リーグ ①磯部(富東) 2勝

1敗(勝本数3) ②原岡(富西)

2勝1敗(勝本数2) ③川添(松

高) 1勝2敗(勝本数2) ④佐藤

(城ノ内) 1勝2敗(勝本数1)

〔女子団体〕

▽決勝リーグ 富岡東4(6) ー (2)1 小

松島、富岡東3(4) ー (0)0 川島、富岡

東2(4) ー (2)0 富岡西、川島3(4) ー (3)

2 小松島、川島3(5) ー (2)1 富岡西、

富岡西3(3) ー (2)1 小松島

▽順位 ①富岡東3勝 ②川島2勝

1敗 ③富岡西1勝2敗 ④小松島

3敗

〔女子個人〕

▽決勝リーグ ①小籾(富東) 3勝

②山崎(富東) 2勝1敗 ③森

(富西) 1勝2敗 ④栗栖(川島)

3敗

◇第21回徳島県中学校剣道選手権大会

四国大B

(6月14日(日)鳴武)

【個人】

▽初段以下の部 ①村田利恵(徳島大) ②福永浩子(四国大) ③阪本陽都美(文理大)

▽2段の部 ①名蔵輝実(阿南支部)

②高石徳香(鳴門教育大) ③市奈穂美(文理大)

▽決勝
吉田ト 平尾

▽準決勝

藤崎メメ 信田

佐藤メメ 日和田

信田メメ 日和田

▽決勝

佐藤メメ 藤崎

【男子団体】

▽準々決勝

那賀川中 4-1 市場中

阿南二中 3-2 石井中

北島中 4-1 川島中

阿波中 4-1 阿南中

▽準決勝

那賀川中 5-0 阿南二中

阿波中 4-1 北島中

▽決勝

那賀川中 3-0 阿波中

【女子個人】

▽準々決勝

敷田コメ 大谷

(那賀川) 浅井

陶木メメ (市場)

(那賀川) 藤原

賀川メメ (阿波)

(那賀川) 畑山

坪井メメ (阿波)

(那賀川) (阿波)

◇第13回徳島県女子剣道大会

(6月21日(日)中武)

【男子団体】

▽順位 ①市場中 ②相生中 ③鳴門第一中、阿南中

▽決勝

市場中 2(7)-6(2) 相生中

○日和田 ドメー ド 岡本

近藤 メー メコ 前川泰

○坂東 コー 原

松村 メ引き分けコ 前川高

佐藤 ドー メメ 藤崎

【女子団体】

▽順位 ①那賀川中 ②市場中 ③石井中、北島中

▽決勝

那賀川中 3(6)-1(1) 市場中

榊原 ー メ 西村

○榎本 コー 大森

島田 引き分け 西木

○大坂 メメー 野口

○敷田 コト 浅井

平野 ツー 岩木

(県警) 信田

(鳴門一) 井上

(石井) 陶木

(那賀川) 浅井

▽準決勝
平尾コ 福多
吉田判定 平野

▽順位 ①岫雲館 ②四国大A ③

▽準決勝

陶 木ト | 敷 田

坪 井メ | 賀 川

▽3位決定戦

賀 川メメ | 敷 田

▽決勝

坪 井ド | 陶 木

◇第31回全日本女子剣道選手権大会
県予選

(7月11日(土)県警体)

▽予選リーグ

第1組 ①吉岡 ②白川 ③大石

第2組 ①小藪千 ②古川 ③山崎

第3組 ①折上 ②森 ③石本

第4組 ①大城 ②小藪杏

▽準決勝

吉 岡メ | 小 藪千

(立命館大) (富東)

折 上メ | 大 城

▽決勝

吉 岡メ | 折 上

◇第23回徳島県少年剣道錬成大会
(8月2日(日)鳴武)

【団体】

▽準々決勝 大野小4(5) (3)2光武

館、徳島錬心館3(7) | (3)1羽ノ浦少

年、延野少年4(7) | (1)0錬武館、阿

南少年3(5) | (2)1小松島少

▽準決勝

大 野 小3(4) | (0)0徳島錬心館

阿南少年2(4) | (4)2小松島少

(代表戦)

▽決勝

大 野 小3(4) | (2)1阿南少年

【個人】

▽順位 ①瀬口智(延野) ②小柏

祐二(延野) ③三橋徹也(鴨島)、

北川真衣(鴨島)

◇第34回全国教職員剣道大会
【個人】(8月9日(日)小松島市体)

【男子個人】

○高校・高専・大学・教委の部

▽2回戦 福多(徳島)メ | 花房

(滋賀)

▽3回戦 福多コ | 田島(神奈川)

▽4回戦 福多コ | 真野(岡山)

▽準決勝

居 村メ | 福 多

(石川)

○中学校の部

▽1回戦 玉田(徳島)ココ | 岩

野(兵庫)

▽2回戦 玉田コ | 石川(沖繩)

▽3回戦 玉田メ | 菊地(山形)

▽4回戦 竹本(北海道)メメ |

玉田

○小学校の部

▽2回戦 今里(長崎)メ | 富浦

(徳島)

○女子教員の部

▽2回戦 古川(徳島)メ | 鈴木

(神奈川)

▽3回戦 古川メコ | 西谷(兵庫)

▽4回戦 古川メメ | ニッ森(青

森)

▽準決勝 古川コ | 溝口(宮崎)

▽決勝

古 川メメ | 篠 原

(茨城)

【団体】(8月10日(日)城北高体)

▽2回戦 徳島4 | 1沖繩

▽3回戦 茨城3 | 2徳島

◇第17回徳島県剣道段別選手権大会
(8月23日(日)鳴武)

【男子初段】

▽3位決定戦

福 住トコ | 坂 東

(松高)

▽決勝

大 城メ | 泉

(阿南工)

【男子二段】

▽3位決定戦

兼 松コ | 張 間

(徳大医)

▽決勝

西 メト | 塩 田

(阿南工)

【男子三段】

▽3位決定戦

小 川ココ | 渡 辺

▽決勝

山 本ココ | 大 場

(徳大医)

【男子四段】

▽3位決定戦

福 山トメ | 細 川

(小松島)

▽決勝

茨 木メ | 小 坂

(県警)

【男子五段】

▽3位決定戦

吉田茂メメ | 岩 木

(県警)

▽決勝

佐々木 コー

佐賀

石本 コー | 河野

3 東京対徳島交流試合

徳島2(6) | (5)2東京

4 東京対高知団体交流試合

高知4(5) | (6)3東京

◇第37回徳島県高校新人剣道大会

(11月22日(日)城ノ内高)

▽準決勝

【男子の部】

城ノ内4(8) | (1)0阿南工

小松島4(7) | (2)1富岡西

▽3位決定戦

富岡西3(4) | (1)1阿南工

▽決勝

小松島2(3) | (2)1城ノ内

川添 × | 近藤

○福住メ | 塩田

木下 × | 中山

金田 | メ | 泉 ○

○松村トメ | 佐藤

【女子の部】

▽準決勝

富岡東4(6) | (0)0城ノ内

富岡西1(7) | (0)0川島

▽3位決定戦

城ノ内3(5) | (2)1川島

▽決勝

富岡東4(6) | (0)0富岡西

○猪尾コ | 中野

○楠メ | 高原

○小出メメ | 高木

○酒巻トメ | 横手

大城 × | 大坂

▽決勝

佐賀

(県警)

(岫雲館)

(板野西)

(徳島)

(県警)

(団体)

(刑務所)

(県警)

(協町高)

(徳市高)

(協町高)

(川島高)

(富岡西)

(富岡西)

(富岡西)

(富岡西)

(富岡西)

(富岡西)

(富岡西)

(富岡西)

(富岡西)

(富岡西)

(富岡西)

(富岡西)

(富岡西)

▽決勝

佐々木 コー

(丹生谷)

【男子六段】

▽3位決定戦

藤本 コー

(岫雲館)

▽決勝

平尾メ

(県警)

【女子初段】

▽3位決定戦

森 コー

(徳市高)

▽決勝

大坂メコー

(富岡西)

【女子二段】

▽3位決定戦

笠井メメ

(協町高)

▽決勝

折上 コー

(丹生谷)

【女子三段】

▽3位決定戦

白川メコー

(板野東)

吉田昌

(県警)

徳島 A1(4) | (3)1徳島 B

○南 コー | 近藤

勝浦 コー × メ 糸田川

西野 メ | メメ 竹原 ○

▽順位 ①徳島 A ②徳島 B ③阿南 A、小松島

【個人】

▽A組 ①西野四郎 ②蝦名久作

③前林利雄、堤茂

▽B組 ①高田豊 ②森本好美

③阿部三十三、小川本書

▽C組 ①遠藤美 ②浜田逸郎

③南充美、株木芳夫

▽剣道交流試合

1 全国健康福祉祭山梨大会参加者

交流試合

土佐生涯剣友会3(5) | (1)0徳島高齡

者剣友会

2 高知対徳島団体交流試合

徳島6(14) | (6)2高知

(岫雲館)

大石

徳島6(14) | (6)2高知

徳島6(14) | (6)2高知

徳島6(14) | (6)2高知

徳島6(14) | (6)2高知

徳島6(14) | (6)2高知

◇第17回徳島県中学校新人剣道大会
(11月29日(日)鳴武)

【男子】

▽準決勝

市場中 3 - 1 木頭中

那賀川中 3 - 0 脇町中

▽決勝

市場中 2 (6) - (5) 2 那賀川中

瀬尾メ - コト香東○

佐藤コ × メ 森

○近藤メメ - 中村

松村 - ココ住瀬○

○日和田コメ - 伊丹

【女子】

▽準決勝

那賀川中 4 - 0 阿南一中

阿南二中 3 - 2 市場中

▽決勝

那賀川中 4 (7) - (0) 0 阿南第二中

○大坂ココ - 村上

小西 × 片山

○坪井コド - 鎌田

○芝コ × 前出

○賀川トコ - 岡花

◇第9回徳島県スポーツ少年団剣道大会兼第15回全国スポーツ少年団剣道交流大会予選会
(12月13日鳴武)

【男子】

▽小学4年生(男・女子) ①谷口

文崇(大野城山) ②楠原光謙(阿南)

③矢部智子(高浦)、河野裕美子

【女子】

▽小学5~6年生 ①長谷川普紀

(小松島) ②谷口拓之(牟岐)

③三橋徹也(鴨島)、大前智仁(大野城山)

▽中学校 ①三木琢司(小松島)

②笹尾幸良(美馬) ③連記洋平

(小松島)、相坂和男(高浦)

【女子】

▽小学5~6年生 ①遠藤律子(大野城山)

②平尾奈海(阿南) ③阿部純子(大野城山)、栗本美香(延野)

▽中学校 ①鈴木加奈子(北島)

②百田みどり(誠武館) ③笠原通世(小松島)、濱田百合香(小松島)

◇第1回徳島県高等学校選抜剣道大会
(平成5年1月15日(祝)城ノ内高)

【女子の部】

▽準決勝

富岡東4(6) - (0) 0 川島

富岡西1(2) - (1) 1 城ノ内

▽3位決定戦

城ノ内3(7) - (4) 2 川島

向井 - メ三島○

○田室メメ - 武沢

○今井メメ - メ正木

○榊井ト - メ横川○

○金西ココ - 喜多

▽決勝

富岡東1(1) - (0) 0 富岡西

猪尾 × 高木

○楠コ - 中野

○笠松 × 横手

酒卷 × 高原

大城 × 大坂

【男子の部】

▽準決勝

小松島1(3) - (2) 1 阿南工

城ノ内1(4) - (4) 1 富岡西

(代表戦)

▽3位決定戦

富岡西3(7) - (2) 0 阿南工

○森メ - 伊丹
山崎コ × コ 西
○賀川コメ - 大城
○稲岡ココ - 谷
宮本コ × メ 谷口

▽決勝

小松島1(2) - (0) 0 城ノ内

川添 × 近藤

福住 × 泉

金田 × 佐藤

木下 × 佐々木

松村トト - 中山

◇第3回徳島県小・中学校剣道強化
錬成大会
(平成5年1月17日(日)鳴門県民体)

【小学生の部】

▽準決勝

阿南少 2 - 1 大野小

延野少 3 - 0 小松島少

▽決勝

延野少 2 - 1 阿南少

【中学男子の部】

▽準決勝

市場 3 - 2 鷺敷

鴨島 2 - 1 鳴門

▽決勝

鴨島 3 - 2 市場

鴨島 3 - 2 市場

鴨島 3 - 2 市場

鴨島 3 - 2 市場

鴨島 3 - 2 市場

【中学女子の部】

▽準決勝

那賀川 4-0 阿波

市場 3-0 日和佐

▽決勝

那賀川 3-0 市場

◇第26回徳島県高等学校剣道選手権大会

(平成5年2月28日(日)城ノ内高)

【男子の部】

▽決勝トーナメント1回戦

谷 メメー 泉

(城ノ内) (城ノ内)

松村 トー 伊丹

(小松島) (阿南上)

中山 メー 高浜

(城ノ内) (川島)

坂東俊 メー 宮本

(川島) (富岡西)

▽準決勝

谷 メメー コ松村

中山 メコー メ坂東

▽3位決定戦

松村 メコー 坂東

▽決勝

中山 コー 谷

【女子の部】

▽決勝トーナメント1回戦

猪尾 トメ 小出

(富岡東) (富岡東)

酒巻 メコー 笠松

(富岡東) (富岡東)

大城 コー 大城

(富岡東) (小松島)

楠 メー 横手

(富岡東) (富岡西)

酒巻 コー 猪尾

大城 コメー 楠

▽3位決定戦

楠 コー 猪尾

▽決勝

大城 コー 酒巻

【県外】

◇第40回都道府県対抗剣道優勝大会

(5月3日(祝)京都市立体)

▽予選リーグ

徳島0(1) 1-0 熊本

白木コ * メ西岡

福多 * 松本

平野 * 桑原

藤本 * 豊田

那倉 * 田辺

北海道1(4) 1-3 徳島

小山メ 1-0 白木

佐賀 * 福多

栄花 * 平野

○林 ツメー 藤本

富田メ * メ那倉

◇平成4年度四国高校剣道選手権大会

(6月20~21日高知市)

【男子団体】

▽予選リーグA ①高知 ②高松

③宇和島東 ④小松島

▽予選リーグB ①琴平 ②徳島文理

③新田 ④高知商

▽予選リーグC ①松山北 ②高松

③岡豊 ④富岡西

▽予選リーグD ①上佐 ②尺誠

③城ノ内 ④松山商

【女子団体】

▽予選リーグA ①高松西 ②明徳

③富岡西 ④宇和島東

▽予選リーグB ①富岡東 ②高松

南 ③済美 ④高知西

▽予選リーグC ①高知商 ②今治

南 ③小松島 ④高瀬

▽予選リーグD ①岡豊 ②高松南

③川島 ④松山北

▽決勝トーナメント1回戦

岡 豊2(3) 1-2 高松西

富岡東4(5) 1-1 高知商

▽決勝

富岡東3(6) 1-0 岡豊

笠松 * 川島

○猪尾 メメー 末松

○大城 コメー 佐藤

山崎 メ * メ 恒石京

○小 籾 コー 恒石忠

【男子個人】

▽2回戦 磯部(富東)メー 向井

(高松南)

▽3回戦 磯部コー 藤井(高松)

▽準決勝 磯部メー 江崎(高松)

▽決勝 花田(高松西)メー 磯部

◇第12回四国教職員剣道大会

(7月5日(日)丸亀武)

- ▽順位 ①香川3勝 ②徳島2勝1敗 ③高知1勝2敗 ④愛媛3敗

◇国民体育大会第13回四国ブロック大会剣道競技

(7月19日(日)高松市総体)

- 各県對抗
- 【少年男子】
- ▽順位 ①香川 ②愛媛 ③高知 ④徳島
- 【少年女子】
- ▽順位 ①香川 ②徳島 ③高知 ④愛媛

◇第39回全国高等学校剣道大会

(8月2日(日)~4日(火)高千穂町武)

- 【男子団体】
- ▽予選リーグ 育英高4(4)~(1)1城ノ内、城ノ内4(7) (3)1青森商業高
- 【男子個人】
- ▽1回戦 松尾(長崎)メ 磯部(徳島)、原岡(富西)メー 田中(和歌山)

▽2回戦 吉田(広島)メー 原岡

【女子団体】

▽予選リーグ 富岡東2(6)~(5)2作陽高、富岡東3(5)~(2)1埼玉栄高

▽決勝トーナメント1回戦

神村学園 4(9) (4)1 富岡東高

【女子個人】

▽1回戦 斉藤(千葉)メコ 山崎(富岡東)

▽2回戦 小篠千(富岡東)ココー 加来(大分)

▽3回戦 小篠コー 森田(鳥取)

▽4回戦 石貫(熊本)メー 小篠

◇第9回全国家庭婦人剣道大会

(8月4日(火)日本武)

▽予選リーグ

島 根2(3)~(3)1徳島

○朝木メ 榎本

○山崎コ 木村

高井 * 手塚

渡部コ * メ 服部

岩佐 ー コメ 河野○

石川2(6)~(5)1徳島

○本田メメ コ榎本

坂上コ * コ木村

久田メ * コ久田

新谷 ー メコ 服部○

○谷本 コメー 河野

◇第22回全国中学校選抜剣道大会

(8月22日(日)~23日(日)福井)

▽予選リーグ 長崎南山3~1市場、市場2~1国吉(千葉)

【男子団体】

▽1回戦 佐藤(市場)ココー 末松(長崎)

▽2回戦 伊藤(青森)メー 藤崎(相生)、佐藤コー 北窓(兵庫)

▽3回戦 佐藤メー 青山(長野)

▽4回戦 佐藤メー 福島(佐賀)

【男子個人】

▽準々決勝

上 垣 メコ 佐 藤

【女子団体】

▽予選リーグ

那賀川 2~1 大里

那賀川 4~0 前橋

那賀川 2~1 板櫃

【女子個人】

▽1回戦 陶木メー 山内(福岡)

▽2回戦 坪井ココ 登(神奈川)

陶木メメー 石井(和歌山)

▽3回戦 河野(宮崎)メー 坪井陶木メー 大野(新潟)

▽4回戦 久保田(熊本)コー 陶木

▽準々決勝 那賀川 1~0 京陵 (熊本)

▽準決勝 那賀川 2~1 宇ノ気 (石川)

○坪井メメー 坂井

島田 * 関塚

陶木 ー コ種本○

○賀川 コメー 米田

敷田 * 気谷

▽決勝 那賀川 2(4)~(2)1高千穂 (宮崎)

○坪井 トコ 平島

島田 * 興梠

○陶木 メー 西田

賀川 メー ココ 弓場

敷田 メー ココ 甲斐○

【女子個人】

◇四国管内警察剣道大会

(9月10日(木)高松市総体)

▽愛媛 5(7) - (2)2 徳島

▽徳島 6(8) - (1)1 高知

▽徳島 4(5) - (4)3 香川

順位 ①愛媛3勝 ②徳島2勝1敗

③香川1勝2敗 ④高知3敗

◇第38回全日本東西対抗剣道大会

(9月27日(日)福岡市)

30将 近藤(徳島)メー 加藤(宮城)

◇第47回国民体育大会

(10月5日~8日山形県)

宮城 4 - 0 徳島

◇第27回全日本居合道大会

(10月18日(日)東京武)

▽七段の部1回戦

末次正尚(福岡) 2 - 1 高橋憲司(徳島)

▽六段の部2回戦

吉岡修一(徳島) 2 - 1 斎藤公英(静岡)

▽六段の部3回戦

横田清隆(北海道) 2 - 1 吉岡修一

▽五段の部1回戦

坂本憲一(徳島) 2 - 1 田村勝利(東京)

▽五段の部2回戦

矢中真一郎(鳥取) 3 - 0 坂本憲一

◇第40回全日本剣道選手権大会

(11月3日(祝))

▽1回戦 堀山健治(愛知) コー

吉田博文(徳島)

◇第3回全日本剣道七段大会

(11月15日(日)盛岡市)

▽1回戦 近藤亘(徳島) コー

中野邦彦(高知)

▽2回戦 近藤コー 大重浩一郎(宮崎)

▽3回戦 俣木正喜メコー 近藤

◇第9回全国剣道連盟対抗剣道優勝大会

(11月15日(日)名古屋市)

▽2回戦 広島 5(10) - (2)0 徳島

第40回全国警察剣道大会

(11月20日(金)警視庁武)

▽2回戦 徳島 5(8) - (4)2 静岡

▽3回戦 徳島 5(7) - (4)2 佐賀

▽4回戦 熊本 5(6) - (3)2 徳島

◇第13回中倉旗争奪剣道選手権大会

(12月6日(日)くにたち市)

▽2回戦 平野ココー 斎藤大輔(南大谷)

▽3回戦 徳園元孝コー 平野

◇四国管内警察剣道選手権大会

(平成5年3月10日(木)四管警学校)

○30歳未満

▽決勝 玉浦(香川)メー 岩木(徳島)

◇第15回全国スポーツ少年団剣道交流大会

(平成5年3月27日~29日富山県)

【団体】

▽決勝トーナメント1回戦

徳島県 4 - 1 宮城県

▽2回戦

徳島県 4 - 0 滋賀県

▽準決勝

岡山県 2 - 1 徳島県(徳島県3位入賞)

◇第2回全国高校剣道選抜大会

(平成5年3月27日~28日愛知県)

【女子】

▽決勝トーナメント1回戦

富岡東2(3) - (3)1左 沢(山形県)

猪尾 × 佐藤

○楠メ 森谷

○大城メー 小林

酒巻メー ト樋口

笠松 - コメ 荒川○

▽準々決勝 富岡東3(6) - (2)1星城(愛知県)

猪尾メ ココ 柴田○

楠 × 西馬

○大城メー 南

○酒巻メト 田境

○笠松コー 井

▽準決勝

神村学園3(5) - (1)1富岡東

原園 × 猪尾

○奥平ココー 楠

永井 - コ 笠松○

○牟礼ココー 酒巻

○有馬コト 大城

◇第17回明治村剣道大会

(平成5年3月28日(日)大山市)

▽1回戦 大澤孝彰(徳島) コメー

黒沢辰雄(東京)

▽2回戦 大澤メコー 中野誠(東

京)

▽3回戦 大澤コメー 永松陟(東

京)

▽準決勝 大澤メメーメ松原輝幸

(福岡)

▽決勝 古田坦メー 大澤

(山口)

編集後記

▽ 48 国体も目前に迫ってきました。

選手候補者は強化部の報告のとおり県外遠征、アドバイザーコーチ佐藤博信範士を据えての合宿と頑張っております。これも剣連会長、役員はじめ会員の皆様方の激励並びに家族の理解により稽古に専念できるものと思います。今後皆様方の一層の御理解と御支援をお願いいたします。

▽ 平成四年度の戦績を見ますと、那賀川中学校女子剣道では全国中学校選抜剣道大会、若鷲旗剣道大会に優勝という快挙を成し遂げられ、監督、生徒はじめ父兄の皆様方の御苦勞、お喜びはひとしおの

ことと思います。今後は追われる立場になると思いますが、この伝統を守り育てるようお願い致します。

那賀川中学校女子剣道の活躍について「全国優勝への道のり」という斎先生の玉稿を石井博先生の御紹介により掲載させていただきました。会員の皆様方には参考になる事項も多いと思われるので研究して那賀川中学校に迫着き追越せの気迫で競い合っていたきたいと思えます。

小松島市で開催された全国教職員大会で古川久美子選手、全国高齢者剣道大会に平岡竹雄先生が優勝、富岡東高女子剣道は四国総体において二年ぶり五度目の優勝をたした。第17回明治村剣道大会

では大澤孝彰先生が準優勝（一回目）という輝かしい成績を残されました。48 国体へ向け大きな励みになるのではないかと思います。

反面、国体二部予選、山形国体等では予想に反する成績でありましたので一層の努力をお願いいたします。

▽ 徳島の剣道も会員の皆様の御協力により多数の玉稿を寄せていただき誌上をお借りしてお礼申し上げます。また、浅学非才の私皆様からの玉稿を校正の段階で文章を削除したり訂正しておりますが、編集の関係上でさせてもらっておりますので御了承下さい。来年度の徳島の剣道には輝かしい成績を上げ喜びが沸き上がるような誌面にしたいと念願しておりますので

会員の皆様の一丸ごころを
をよろしく願います

（松村 幸彦）

印刷所
編輯所
發行所
癸亥年五月二十一日

印刷所
編輯所
發行所
癸亥年五月二十一日

印刷所
編輯所
發行所
癸亥年五月二十一日

印刷所
編輯所
發行所
癸亥年五月二十一日

印刷所
編輯所
發行所
癸亥年五月二十一日